春
俳諧萬時記新葉草
夏

俳諧歳時記新栞草 巻之二

京都　山口素堂編輯

新かぐやま　蓼の花
馬蓼の赤　蓼の種
物蓼の花　蕎麦の赤
車前子　苗香の實
ゆうがほの花　からすうり
あつさ　通草
茘枝　つるまめし
姜の花　種ふくべ
種あすび　大根菜
菜種　菊
小菊　胡麻
菜　かいらぎ菜

四季

四月

卯月

帚杖蘿（イヌトリクラヘ）　蓋瀘揄　黄布称の御神事二四日部日加賀の氏人騎馬そ詣づ帰る時市原野建理の芝とて紙ゝ帰り杖を家にて十文小多ふを編み例のごとく甚奥ふり

稲荷祭（イナリマツリ）　卯日　官幣大社稲荷神社の祭　神輿五基各氏地を渡御す　**伊勢**

神衣祭（カンミソマツリ）　十四日　[云本拠源]　神衣祭は神嘗会のなくらう神服部潔齋一て三河の赤引の神調の糸を以神衣を織る又麻績連と云氏人麻をうゝて和妙荒妙を織て神明に奉る是神衣祭と八月二云く　**岩梨**

[陸奥三戸図会]　江戸三井寺の山中に有苗の高き二三寸葉を地に摺て生ず二月小白花咲くこと兎耳草の花に似たり三月実を結ぶ大豆の如くにして固し一粒頻摘りてはし一粒の実ひに変する小兒皮を剥て食へ味微酸く甘し　**石蓀**

つはくみ菜　間引菜
中国より大根　粟　苅
秬　苅　稈　苅
蜀　黍　玉蜀黍
葺　葺　特

和漢三才図会 莞花 花茎並藤に似て小し三月花開く 或は白花と又黄色花、上の説の如し紫白の花二種あり 三四月花咲又一種文蓋有 茅白色黄色紫色あり **覆盆子** 本草 釣刺蔓 ちりて一枝五葉 葉ありて面皆皆青く光潤し四五月実の熟す **蘭花** 本草 虎鬚草一名吊兵草 **紫羅傘** 本草図経 葵 尾長くつく紫 蓬蘆、蘆、樹母、蛭母、茅元、此名種あり 実の熟す 鄭玄の説の如し

射干 似て入る葉尾ハ蒸子花の如し **石蘚花** 或ハ石蘚 本草 石上に叢生す 根 糾結して玄紫 蓋葉生して皆香色 乾くときハ赤折下して砂石を以て裁之 或ハ物を以て盛 底下に付 類あを以て浮く 年を経て かを守 俗孫して千年用石蘚 **皇高祭** 八日

大和名所記 南都奥福寺中門に於て仏生会を行ふ 僧人 香薬を以て鉢の中陸王の香を奏 花を面の皇 きを以て 俗此法会を 皇高祭 **梅天** 杜甫詩 南京西浦道四月熟黄梅湿々

もち葺 揖たけ　かりも葺 蘭葺
ちち葺 長皮たけ　柳葺 天物葺
岩たけ 幼葺　斎たけ 物葺
いくち きめじ　きのさくらい

杉 蓋　稲 苅
田 苅　中 稲
八束 稲　稲 刈
稲 古く　稲 干
稲 垣　稲 塚
稲 舟　稲 かけ
二束 稲　毛見 田を守 小田守
秋の田 穂

長江去、冥々細雨来、 厳維詩 梅天一雨清 潘稚美書 唐人 成都を出く南京に行則蜀中二梅酒乃ち四月に在り是四月の梅酒を云又熟梅天 葉柳 本草 葉初黄美を生し即ち黄莢花を開く 葉長成 葉を至て 葉櫨 戈广呂一瓜 蕉門伝統 蕉を事とす 蕉門伝統 葉に 四月より黄ばむ 新緑を貴ぶ 花抽 大和本草 一種の花抽 ことの首 実小に 味大抽 花白く微し丁香の香 花を白く小樹 花白く 二三尺枝茎勃く葉 蓮の蕊 本草 蕊ハ藕の芽泥を穿て白蓮を成す 五六月 蕊ハ藕の行鞭の如し長きもの丈余 **白丁花** 和漢三才図会 戈図会 蟹ハ相伝る 蟹ハ藕の芽 **飛蟻** 和漢三才図会 蟹ハ相伝る 蟻二人家の古き松の柱 赤き愛し 翼を生し 再び 蟻を生し 蟻を生し

山田守

生類

蕪　帰ル　去ぬ乙鳥

鳳　初　鳳

つるの鳳　未ノ鳳

羹　喰　筱ほさら

鳳凰　又春ト上　色　鳥

小鳥つるの類　つるの鳥

鶯　小陵鳥

鵲　目　白

眉画鳥　頰　赤

山　雀　四十から

五十から　蒐つるぐれ

翠　雀　まし　赤

連　雀　豆　鳥

豆ほうし　鶉

啄木鳥　てらつつき

鷓　鴣　あをさぎ

鷺　鷸

椋　鳥　鶺

鶺　鴒　雀たかき　石まつ

みそさざい　又冬ト七　翡翠　又支

太刀魚　稲負鳥

落　帖

四季　非階歳時記新撰草

八月　生類

蟹悪く除去る志ぶく試験有て殺猪人の話あるを初て聞て其所の里人山に住色黒くして毛多し

初松魚　東医宝鑑　松魚性平にして味甘く毒なし肉肥色赤くして魚類多し　大和本草　松の節の如し故に松魚と云東北江海の中に生ず　相州鎌倉或は小田原の辺に多くを釣て江府に送る多くは初鰹と称し賞味す又鳥帽子魚。豆相の海辺鰹先寄らんとする時に一物流を来る大さ二尺斗形ち鳥帽子に似て左右に鰭の如き物有て色褐紫にして光澤有是を鰹の鳥帽子と云漁人此を見て鰹の来る兆と為す西三日を経て果して大に鰹を獲る故に鳥帽子魚と名づく

兼三夏物

麥秋　和漢三才図会　麦を泡磨りて細末にし乾て冷水に浸し

早鮓　是又一夜鮓なり初夏に此製魚貝の数種を細く截て

蠅　本草　夏出て冬蟄す暖を好ひ寒を悪む水に溺て死て活く

蝿虎　本草

小蠅蝶二類共に蠅を捕食る故に蠅虎と云

方日鳥　和漢三才図会　鵲正字抄に詳なり　大き鳩の如し黒色にして稽き尾尖き黄赤色にして背に白斑を以て上顎と本の嘴美あり又大鳩の形色也しく吳に

日光祭　十六日　神輿三基御兵礼行装束三仏堂の前を練る　倒年寿祈

麦酒　東医宝鑑　麦酒は味甘く性温夏月の飲宜しく是本邦の三社の祭あるに

厚朴花　和漢三才図会　厚朴は味甘く性温なり故に柿鮨に入て熟す故に柿鮨と云　本草　厚朴　実本質朴にして皮厚く故に名つく　本草　梅に厚朴を蒸て多尺に近し一擲の葉に似て刻歯あり毛茸綿の如く葉嫩葉を生じ交花を生ず形ち牡丹花に似て色紫大さ一尺ばかり殼実を結ぶ実青子の実に似て熟する時殼自ら裂て表赤く中の子黒し老木の皮はるうろとの敷ものに剥て薬用に入る

牡丹　東物紀源　隋場帝の世に始て牡丹を伝ふ唐人も又未芍薬と云開元の時宮中及び民家に尚之今名称多し　貞享式　牡丹、牡若、此二種和漢乃遠ざかる詩に牡丹を表とし中

魚	河鹿	
江魚	くぐる藻	
崩き藻	松完へ入	
衣食類		
搗衣	碪	
衣新石ちぢれ	ちぢれ藻	あやすれ
新米	新米	
米ちとし	酴醾酒	
毛ろみ	新酒	
中汲	古酒	
漬	鰹	
茄子	茗荷	

古て俳諧の加減より二名を交に用ひたる初交する花のおさ故なり ● 木芍藥、牡丹の異名 賈魏花譜 天宝中禁中初て木芍藥を重んず四本を移して紅紫淺紅通白、興慶池の東沈香亭に植移せしと云 ● 花王、 白氏文集 牡丹芳、花開落花二十日一城之人皆如狂 歐陽脩花歌名 錢書云葉ゝ白人牡丹を謂て花王と

今姚黄を真に王として魏紫は乃ち臣后 ● 名取川、牡丹の一名 薩摩守 昔ありし人、あの花を深く愛て名付おき

蕚は俗名百宝を以て探とす 天津人今 国院左大臣 ちぢれ花さかりなり

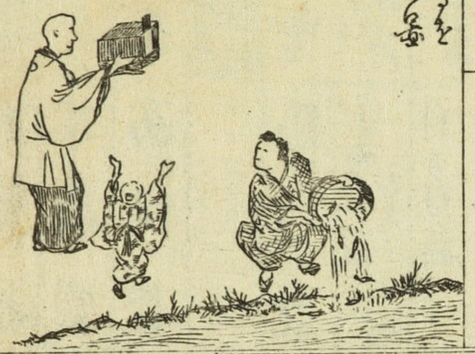
● 富貴草、ふくさ草、牡丹の異名 又山橘、 豊摘、牡丹の一名を牡丹のことく赤る説は非なり

花 ハナ

本草 面青く背紫にして細毛あり葉下に蕊を付く一花

神釈

彼岸	三村祭	
堺天神祭	白髭開帳	
敦賀祭	放生會	
地蔵盆		



ちらく状絵彈の如し 俗すれたる二番白也て黄蕚中空しく黄なる実を結ぶ見るけハ南方寄風なり

杜鵑 ホトトギス

和漢三才圖會 杜鵑の形ハ雀鶺鴒にして色灰黑後白し 雪の越方

翅も羽も白き班あり口中赤く頸に小斑毛あり脛掌蒼色指二ツ連後の趾二ツ 法華経に異二季来鳴

● 杜宇、子規、鶯鶯、郭公、霍公鳥、ふくさ草、蜀魂、蜀魂、姉帰、冥途鳥、四季の囀長、時を忘、俱伎羅、謝豹、杜鵑、時の鳥、慈しむ、三月過る、網を、蕃を、勧農鳥、さつき頭かなの部ゝ注も○杜鵑ハ蕚の巣に生卵乃中小鷹公鳥独所生而已父小似而者不鳴母似而者不鳴下略 漢世継物語 ほとゝぎすの子なりけるものとこそ聞侍りしかとも

蕚寸付 はなちく 放生會

無二憂物 ボウフリムシ

子子 宋澤之戊壬 俗云撫子 溝泥の中温暖相感して小貴

菅大臣祭　御靈祭
素名祭　菩薩祭
宰府祭　西院祭

公事故実

駒　曳　駒　迎
月の弱　春原の弱　上野の弱　むさしの弱
考ものの弱　ほさかの弱　引まけ弱

歌　奠　司　石
秋　社

○九月之部

乾坤

重　陽　重　九

蛍　周令

蛍は長さ二三分所黒色微し科斗の形に似て米に一曲一直して惟を[illegible]のごとし[illegible]法

腐草化為蛍　和漢三才圖會　蛍大抵大さ三四分黒色にして胸額に赤点有り其尾有り[illegible]光銀色の如し[illegible]

●宏の蛍、業求　晋の車胤家貧くして常に油を得ず文月[illegible]練の嚢に数十の蛍を盛て書を照し夜を以て日に繼ぐ[illegible]宏の蛍と号す[illegible]

家語宏の説云[illegible]漢字に蛍火と出る[illegible]

[illegible]後世の俗[illegible]作例なり

乙　土塔會

[illegible]四天王寺の[illegible]塔婆の前に土塔を[illegible]神牛頭天王に古へは毎年四月十日大[illegible]礼[illegible]

[illegible]天王寺僧[illegible]行[illegible]

常盤木の落葉　四時

[illegible]木の新葉生して後古葉の落るを云[illegible]

[illegible]松の[illegible]常盤木と称[illegible]松の葉然は

秋[illegible]松の外の[illegible]

[illegible]四時常盤の木を[illegible]

時鳥　トキノトリ

菊の節句　きくの日
後の雛　紀くの雛
十三夜　後の名月
後の月　三夜月　月の名不至名月
秋色山粧ふ
春時雨春を惜し
春霞暮秋
秋ふかみ　秋をしむ　行秋　秋ゆくく
秋もすゑ　秋の後　秋の限　秋の名残　秋の別
冬待　冬近き冬籠
九月尽

植物類

社[illegible]を[illegible]

[illegible]字の[illegible]

[illegible]

[illegible]

菊の花世俗　くるの菊　きく瓶

十日菊　後日菊

残菊

菊合

白菊　黄菊　茅き菊　百菊

水和菊　菊の花　丈低く小菊　百夜草　菊艸

芍薬　牡丹　仙蓼

我木香　佛甲草　小蓮花

菊菊花　芦の穂俗

尾花数　鴨上戸　杏子紅葉

大神祭

神社啓蒙　大神社、大和國城上郡に在る所一座大

依くるる　己貴命大神と大三輪の神二大物主神の御事二三輪山

中古縁ハ三社大物主神活玉依姫と云女のもとに忍び

姙て及て父母しらぬやしもむ女をもつて神人の来

たりて夫となる事なり　此神を祭る衣の裾に針を付て

その糸のたるまるを引て尋ねるとかや

三輪山　（上卯日マツリ）

大津祭

四宮神社ハ江州大津にあり

神社啓蒙　小日枝、大日枝、氣

比、小禅師、右四座同社にて故に四宮と云又社説に云

所五座中ハ彦火々出見尊を以て本社とす云々此説も

日吉叢上卯日

老鶯

枕草子　文秋の末　十論為縛抄　支考　俳諧秘伝記　故翁九者

物の名に此詞あるもしるし　病無

此詞あるもしるし　老鶯の子鷹

「さくらの花の盛に」

踊草

和漢三才画会　花二穂小葵に似て両三對生す三四

月葵の花のごとく白色に微赤を帯人の莖を

着く深く根を故に俗人醉花草と也又流離草を以て選

綿掛

更衣に布子の綿を掛

き去て給へるを云

和哥

祭

十七日○紀伊國和歌山にあり東照宮の祭礼に名産賀

茂と元和七年紀伊頼宣の勧請し奉る社也山谷

相撲流鏑馬あり又堤下の土人太刀を佩さし

踊を事とする也雜賀踊と云今日神事

必用の食有、菊蕊を刻刀のごとく切て一方ハ事の如く

なる也又ハ一方へハ大豆の粉をつけて家々に是を製す

和清天

白氏文集　四月天氣和旦清、緑槐陰合沙堤平、又月詩三、孟夏清和月東都同敬官、

和清ハ清和ハ同じ

若葉の花

貞享式　古式に未の若葉ハ炎を消し

芋の若葉ハ表裏ともに青葉ハすべて雜煮に用る也

或ハ赤き花に若葉の二形に若葉を花を結

柿　柿の実　柿紅葉　楓紅葉　櫨紅葉　下もみち　紅葉かつる　毛茸草

紅葉散　又冬　紅葉散　焼川の水の　芭蕉破る　うちうち　蜜山の毛　蜜山の綿　枯野の毛　枯壁の毒　芋の毒

楓 もみち　白膠木紅葉

梅 もも　桜 さくら　色久四松

柾 まさき　南天の実

椋の実　核の実

ぜんそんの実　招　穀　柚　橙

槙 ちみち　漆 うるし　櫨 はぜ　油さし

柘の実　漆の実　ちちの実　もものの実

菩提子　九年母　柑子　密柑

びてるる事ともいひ夏ともいふ何故に決せぬまつ今此もるに月花を風雅の一巻の餘事とするものハ加減して四季を自由に配るあるべきハ若葉に花落ひて次して夏と定む

若葉 新樹。

新樹ハ四方の梢青くやうやうして木々の若葉皆新樹なり

若葉の楓 往来草 卯月ば

若葉の楓ハ色ハ黄白色なるもの多く行たるもの多くなり

ちく 病葉 ちくの夏山に初葉のめく赤くあり又ハ黄白色なるもの多く行たるもの多くなり

和訓栞 ちく葉 岐なりて

綿蒔 江漢三才図会 祖徳に往昔垂後の外戚末を以て安徳天皇を木曾に中古の草後

始る赤朝垣武の朝に即て類聚国史に云ふ中華ハ宋の宋中華に元二百年ばかりに山ちの種を下すこと早晩あるものハ八十八夜以後麦苗の陰あるべくまるを拾く晩さるものハ四月麦を前ごく拾の麦を拾ふ

堅田祭 或説に祭の日上の巳ある神

金柑　果柑　柵

けんぼし　重陽　橘

佛手柑　西海子

榲桲　稻　榛

櫟　桐油の実

榧　茱萸

椎の実　國栗

栗　栗 いが　栗

栗 いがの拾ひ

椎　柴

海そで志内　楠

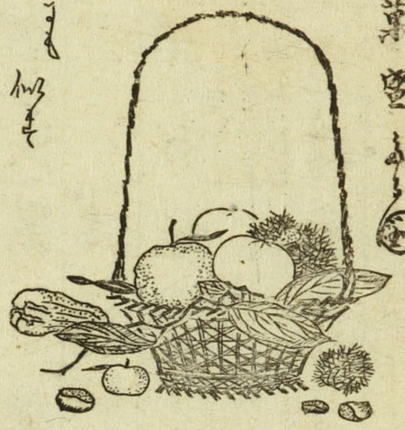
市武野 おれり柿　柿 柿 志ぐるし

詳なる沈佛志に云聖国むかしハ柳国の在に云又冥三島の事ハ伊豆北を今聖国に云出来る西にこの地伊豆のものの計五日江ハ観音山の城より衣川に勅使せし天神の社ハ二月子の日ハ今上の巳日に祭る所ハ神田の神二聖国の説に一代江戸に誕生ある所に神田の神を社ハ所に勅使に云

戒壇堂開帳 花摘。江ハ比叡山にあり 八日

斎王編年記弘仁十三年六月参議左大弁藤家業戒壇堂を建ぬ事ハ月十一日勅勅詔を下して創めて戒壇を築十四年四月十四日修禅和尚義真始て受戒を行ふ記事四月八日諸人斎法を女人ハ常に叡山に登ることを禁ぜ今日許して東坂本の花摘の社に詣ずる花摘に云花盛を作て小釈迦の御像を安置す此社ハ傳教大師の所母堂妙徳婦人を祭る婦人存生の時大師西塞面に登山ハ一度此日女人参詣を許すに登山一度此日女人参詣の故を解云

菓類



柚
橙
柑子
柚の実
橘
柚の花
橙の花
柑子の花
橘の実
橘の花
柚の実
橙の実
柑子の実

栗 ちいさき丸きもの 五月 中旬 柿 ひやうたんの形しも柚の実也 中旬 山椒 ちいさき丸きもの 五月 中旬

賀茂祭（カモマツリ）

葵祭。御形日。【公事根源】先ッ上卿陣ニ葵桂、諸髪、着ニ衣冠ヲ参ス。

国の〻一を作る当日使ハ近衛の中少将つとむ若者のつげ日吉神社の人〻葵桂の髪をかゝゝる賀茂松尾の社司前の姫ハ寸賀茂の建角身命の女二あり紀せゝの小川の辺ニあそび〻に川上より丹塗の矢一まゝ下あり下略ハ依姫此矢をとりて我家の屋根ニさしたるに懐妊して男子をうむ父を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

部類 伊勢諸嶽東詣雜歌部

ふるゝ酒　ふるゝめ酒
柚味噌　とち餅
新蕎麦　青豆
芡　柿　茸　一寸
九日小袖　菊ふるゝ
新綿

神祇

那の宮別　山口祭
桂宮相撲　生駒祭
鞦馬祭　伽香宮祭
生玉祭　醍醐祭
太秦祭　牛ふるゝ

葉白菖に似て大に葉濃して毛花実ともに白菖に似て肥大に蕊を正とす近所に紅あるもの白あるものを

出雲国風土記に曰ふ秋八月の産名を好くして白花が開くも不

杜若を云かきつばたと杜若の字を用ふる実は誤に杜若とは

ヤブミヤウガ二葉子花ともに赤し又和名抄に劇草を

かきつばたと訓ずるは誤

風車の花（カザクルマ）　花彙　經枝杜丹　蔓卅葉莖　鉄線の類に花八辨にして

杜若を云かきつばたと訓ずるは誤

又白色あり二三月に蔓延す

かんさう　和漢

三才圖会　加豆古宇島正字未詳類らくい是鄭会ちんん

狀い杜鵑に似て微赤色を帯ぶ後白くして夏極まるもの

狐の持ち赤二ツ前後に侍く杜鵑に類して仲夏の

後声あり秋後毒を止む千歳大にして日亮加豆古宇

ともいふ如し毒を山林に生ずるに人家に近つく○支那

俗云かんこるは嘆子なるの字音なり呼誤まるもの

蠶蛹（カヒコノマユ）　四会　孟夏月蠶車畢居妃献繭　和漢三才圖会　繭を作らもしまもるに紀

蠶黄を用て物にしてこれを食ふ米を食ふ故に身

白色に透明なるものを擇び出て捲の中に投ぜ其ら稚成さ

牛祭之圖

自文字の
牛ふるゝ月も
芙村

拾遺草を用ふ

おのゝ中白を作ることあり

一名曉蕚ふるゝ二番蚕

裏ふるゝ部さかりせるゝ

原蚕　周礼註に云原再也

蟲頌図経　蟹の類あり

今人以て食品とす佳

味ふるゝ

和漢三才図会　擁劍蟹は江海に生ず大なるもの味美也

塩ふるゝを以て煮ふるゝ

大和本草　蝦蟹（類表録）云京の西新大寺にて人の指のごゝ

白肉を取食ふ

長尺余上に芒刺あり結ぶして

ふるゝを用ふ

時珍曰大さ蕪の如く味美ふるゝ長しゝ足紅にして短しゝ背の

色翠毛を帯ふ翅毛黑毛青を揚ふ女人の首物

を飾ふるゝ

和漢三才図会　鴉　俗云川世比形小ふるゝ池川に在て

て真を捕る蕎麦俗云山世比形大ふるゝ山渓に在ふる魚を神

世比とは少微の假名相通ふるゝ

一尺ふるゝ中に鮮ふるゝ又鮒ふるゝ

蟹鰕（カニヒシコ）　**和漢三才図会**　三才図会云

異三異物　**醤相草**（カワセ）

三代実録　元慶三年正月三日癸酉摂津国蟹醤陸奥国鹿醤を

貢して神饌に奉る

蚊（カ）　蚊柱。**本文類聚後集**　秦ふるゝ是を蚊と

蚊ふるゝ蟲ふるゝ是を蚊と

四宮祭　下鳥羽祭
五条天神祭　鶏の餅
白川祭　賓の市
　　住吉相撲會
神田祭　岩倉祭
小倉祭　河内宮祭
岡崎祭　度會新嘗會
伊勢山辺宮　河内宮祭
　　城南神祭
上雑波祭　嵯峨祭
八幡花祭　鹿鹿祭
淀祭　逆髪祭

立或ハ立蚊ハ文也人の肌膚に文まるの義ニ時珍曰本草綱目の中に蚊ハ水中に産し子を水中に産し子子出と為仍て変し夢の浮橋かくるるなり

五元集 蚊けむり　千用

蚊遣火　又蚊火

月令廣義 蚊、鼈の骨を煙に焼げハ蚊まのがれ死も次に鱉乃鍋灰の中に埋し子を水中に産し子子出と為仍て変し夢の浮橋かくるなり

月令廣義 蚊、鼈の骨を煙に焼げハ蚊まのがれ死も次に鱉乃鍋灰の中に埋し子を水中に産し子子出と為仍て変し夢の浮橋かくるなり

月令廣義 蚊、鼈の骨を煙に焼げハ蚊まのがれ死も次に鱉乃鍋灰の中に埋し子を水中に産し子子出と為仍て変し夢の浮橋かくるなり

蚊やらふ　蚊やらふ　あぶ云ハ皆やるを活用うしたる詞ニさまを

蝸牛

紀事 此月より五月ニ至る三春西ハ蝸牛多く出て或ハ

床に登り又壁に粘くるく登るときハ其跡蛞蝓ハ盡きハ

蝸牛角ハ多く身

蝙蝠

時珍曰蝙蝠斉人呼て仙鼠と形鼠の如くして

寒蓮 反黒毛ハ蝙蝠ハ四足及ハ尾ハ連合て一つの皮ニ変出て冬蟄中日に伏し夜に飛て蚊を食自育ス

蚊帳

況文 又蚊帳ハ草の帳なり

刈葱

本朝食鑑 久葱、春葱、二種ハ辛酸味ハ和して佳美ニ

天満流鏑馬　北山祭
津村祭　鳴滝祭
桂川内裏　住吉神送

公事故実

重陽の宴　菊花の宴
不堪田楽

○十月之部

乾坤

小春　下元 十五日
亥の子　時雨
初しぐれ　もみぢ時雨
夕しぐれ　小春時雨
小しぐれ　先しぐれ
川音の時雨

吉田祭

中子 **北一社註式** 或人曰六十六代一條院永延元年十一月廿五日中ノ申今年始て祭礼誓願ニ付て公家の所沙汰と為る **江次第** 四月中ノ子十一月中ノ申、裏書云、吉田祭永延元年始之山陰中納言一家

社記 江次第ニ上上那多賀の大社ハ伊弉諾尊、水地ハ無量寿仏

多賀祭

當麻祭

上申日　大和国葛下郡當麻郡比古社二座　磨子王子命比賣命　そのほか原一年日

使た川

雁鳥の塒入

和漢三才圖會 四月羽毛を易ル　肉ニ数ツ餅、意に任せ日を逐て脱落て新毛を生ト　七月中旬に至て舊のごとし　○片鳥屋　訪年　雨片鶴一歳　鷹

風　初霜　初雪　初氷
冬き　冬籠
冬うゑ　北窓ふさぐ
炉ひらき　火燵きる
まくり炉　霜
霜凍　この花　雪
むつの花　氷
落氷　氷面鏡
ゆむき　さむ雲
はめたき　ゆゑ
月冴る　月冴る
鐘きゆる

百首抄 四月八日鷹を籠へ入れ毛をうえさせるなり此時羽虫の葉を飼ふ草をも飼ふ草をもれ飼ふ

同三百抄 鷹屋 鷹屋 鷹屋 毛をうつる 鷹屋 鷹屋 鷹屋 毛をうつる 鷹屋 鷹屋 鷹屋 毛をうつる

若やけ　稚

植物類

落葵　木の葵　木の花　木の葉　木の実　衣

えの葉　茶の花　木の葉時雨

山茶花　復花　冬木の梅　笑　笑

松風の時雨　宮　笑　むろの梅　枯柳

枇杷の花　八ッ手の花

柊の花　梔の花

冬牡丹　草かる

枯尾花　きりぎりす

菊　蕨　蕨このもの

萩かる　葛　くるみ

枯芦　ゆきの下

石蒜の花　麦蒔

蕎麦　苅蕎

大根引　冬木立

水仙　菊　きりぎりす　枯野

えびづる　葱

ねぶか　胡麻引

水菜

四季作階歳時記新撰

職業所の神を祭り此地に祠る故盖此神は稲食を掌る故依て里女婚を為ものは此祭礼に必釜鍋を戴て神に奉て殿に嫁する事に成り少壮の男に嫁するものは二枚を用ひ三度嫁するものは三枚を用ひ里婦笑厳を蓄て数数を重ね繁盛の故の名に因て芦胡まぐべきなり世に云

王孫花　名医別録　王孫は海西川谷及び汝南の城廓の辺褐まんくるに見あり

下に生ず毒を無聴曰王孫和名ちうへは往昔朱朝に仕へる明らけし今後るものあし時或特に多毒の叫して療病の功最大二分市國の里俗王孫花と称するもの是なり

兼三夏物　**津波須**

紀漢三戈圖會　鄭の小あるものの五六寸のときは波須と名つく西国にては和加奈と号き九月尺許のものを眼白と云十月二尺に近きものを敷と名つく江東にては伊奈太と云仲冬長三四尺ばかりのものを鰤と名つく

ね

練供養　紀事　十三日より十四日に至て大和西方寺に於て法会を修す十四日練供養を

僕射拱佩の女中将姫の忌日二中将姫尾と称して善心尼法如と云　往供養縁起　あの来迎引摂の法事は恵心僧都

護念院本は紫雲庵と云法如尼草庵の旧跡に寛弘元年の比僧都并に寛印と共に此所に移り木造廿五菩薩の假面を彫て因二年四月十四日法如の往生の日を以迎摂会を修し毎年是を横川の花蕊院より移す処に

兼三夏物　**根芋**　紀漢三戈圖會　蔵、和名伊毛加良一云伊毛之俗云須伊木俗云根芋

な

夏羽織　草にてはの羅ホ近来の俗服なり

中山祭　中百日　神社啓蒙　京三條猪熊四条にあり又六角堂の南往然の京に近庵にあり上の二条大宮岩神に

分さまたる中山大明神と中は新羅明神と謂なり

夏木立　元亨慕要　夏草曰茂草木

曰射林茂林○いづれも新緑なり

塩水を用ひて慈乾し脯を味ふ生ずれも美に似たり

鰹節に云鰹節の中ばを細くして枯まる故云江戸

生節　書陸圖　鰹七人

てるを色鉛に似たるを寸にして

兼三夏物　**夏の月**　易

生類

鶯の子 鳴 鶯 鶯 鶯の子 鳴 鶯 鶯 鶯の子 鳴 鶯 鶯

未兎夜喜引
柴漬竹筍
網代守
あじろ　あじろ木
あじろ人

衣食類

麦の子餅　茶の口切

口切茶會之圖

式、汝次茅之輪を結び、橘氏の祖廟にして世俗妊娠の婦女嘗社の砂を取て帯襟に佩ぶる是檀林皇后嘉智子の遺風二〇近世官幣大社に称し奉る

卯の花　和漢三才圖會　拘子揚櫨　数稜あり山空木、苦根卯木、唐空木、三ツ葉卯木、ぐも山中に有、人垣根に植る山空木中ふくらかなる空虛木にて名くるなり淡白く肌除青空にして花葉円く長く四月小白花を開く長簇を為す愛玩すべし俗云卯花是二〇十妹妹苦根卯木に似て垣見卯、雪見草、三名共に卯の色の異名に

卯花衣　挑花問答　表白、裡青、柳同　四月吉日を着す云

茨の花　和漢三才　八雲問抄　うばらの花　四五月の頃に咲

夏枯草　和漢三才圖会　夏枯草、茎の形矢筒の靫の如し和名字流木云

童子　鳥　かくまの吳名に灌頂口傳　此名は深山の木乃うとうとさ住かうらの毛ゑの為て小童の髮の色

干菜　干大根
うけ菜　青干菜　切干
蓋漬　くき菜
くき大根　鮫汁
ふぐくき汁　塩鯨
海鼠腸　雲子
貝焼　すきやき　鍋や記
納豆汁　蕎麦湯
大根ふろ吹　頭巾
丸づきん　角頭巾　皮豆袋
紙衣　袴入
綿子　綿ぢうし

四季非時歳時記新撰

鸚鵡実　大和本草　吉利子樹、和名字久比すゝ云所々山林にあり小木にして葉は山躑躅に似て淡白く初夏月実熟す京畿内にあり生花に用ゆ花は白き四瓣にして実熟す京畿内の木にて実形円に似て上窪

扇　五雜組　大明以前扇多く團扇を用ゆ　和漢三才圖会　方扇、俗云唐字知波騰に似て物を打ぶく故に字知波、こゝ称す

鵜飼　鵜舟、鵜縄、鵜遣、和漢三才圖会　鵜匠、鵜の舞、

鸕鷀、和名之方　今云止利　拾遺和名抄云大鳥を鸕鷀と云日本紀私記亘止利　亘止利　志万亘止利　小鳥を鵜と云俗云宇　○弘景曰此鳥卯を生す

口に魚を銜て落近国に多し未だ見物せず所謂上川七艘下川七艘合て十四艘の舟長良の渡り三里の間を上川と長良より川下三里を下川と云上川の船を上品とし舟一艘

鵜遣一人舟当一人二舟の舳先に鉄網を下し舞鵜十二羽を乗せ十二の鵜の縄を左の手の指股に持て

十月衣食神釈　四月より のく　七十

蒲　園　衾　[illegible]

[illegible]　[illegible]

小　衾　紙　衾

古　衾　鷺の衾

神祇

神　送　神の旅

神の留守　大社神支

神[illegible]　[illegible]　取　越

達　广　忌　奥福寺法花會

金毘羅祭　維摩　忌

御命講　法花會式

十　夜　聖　一　忌

[illegible]を十[illegible]に衣たる[illegible]を舟[illegible]に[illegible]を[illegible]の右の[illegible]

[illegible]く魚を吐〜又水中へ追入[illegible]先のいそ[illegible]

[illegible]て[illegible]と魚も次第を遲く[illegible]

[illegible]長さ一丈二尺[illegible]の首に執を入て後中に入[illegible]

[illegible]月の入[illegible]舟をおろし月末の間は[illegible]

[illegible]を着[illegible]を[illegible]元三四月

[illegible]て八月三十日をかぎりとす

の　残花

[illegible]式　此詞は古今の[illegible]あり[illegible]

[illegible]の[illegible]は[illegible]

[illegible]て[illegible]夏

蚤　[illegible]三[illegible]國魯[illegible]赤[illegible]

[illegible]る身[illegible]首六

足[illegible]て[illegible]跳る夏日人家の湿熱の[illegible]より生

[illegible]ものの[illegible]牝牡[illegible]

久

世祭　中旨　山城国乙訓郡久世神社上久我の民屋二丁許[illegible]

[illegible]より姜妻明神[illegible]号す　三代実録　貞觀八年

八月十四日丙戌山城国正六位上

奥我萬代[illegible]神[illegible]授[illegible]五位下

國祭　山城国[illegible]茂[illegible]　公事根源　三十代

欽明天皇の[illegible]年四月[illegible]吉日を[illegible]

[illegible]和[illegible]詔あり[illegible]国司[illegible]を検察[illegible]の國

[illegible]

公事故実

更　衣　孟冬の旬

[illegible]　[illegible]茶の[illegible]

燒糟を喰　拝　墳

○十一月々部

乾坤

曆　賣　髪　置

[illegible]居顔見世　子　燈　心

深　雪　雪　吹

[illegible]　[illegible]雪

四季　非時歳時記新撰草

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪まろげ　はさま雪
雪やけ　雪垣
雪竿　雪まろし
雪丸け　雪佛
雪女　雪つぶて
橇　雪車
雪踏　はきぬさ
霙　ひらた
凍　まぶた
氷柱　氷
霜はし　霜氷
霜鐘　氷

出羽國の民家悉く深雪中に埋る年毎に然り稀に世に出ることあるまれなる物の子乃ち雪くさもちなるべし

[新撰六帖] おけ〳〵

衣笠内大臣

や

山科祭 ヤマシナマツリ

上巳 社人勧修寺の南の境内往還路傍の水辺に修寺家の祖なり寛平十年より然はすりて宮幣あり今世に山科祭といふ諸司現神

[俳諸] 八王子天満宮西社の祭に天満宮の祠は愛宕郡矢脊の里にあり八王子の社は天満宮の巽二丁許の山麓に有

上巳 八王子の祭

八瀬祭 ヤセマツリ

傳ふ菅家少年の時比叡山法性坊の室に入て学文中往来休息の所に後人社を建て土人祭の日大竹を切て垂長に立て其の扇状なるを多く挿け鏑矢を射て以て一奥なり矢背一村凡百戸ばかり父老或は上なる人をのゝ〳〵又吾をはしてけらくふまの俚語をすゝ使に出なるこゝのなり

崎日の使 ヤキヒノツカヒ

[名勝志] 八幡宮寺中讃岐に云日の使四月三日是一郷万代の勤役なり山崎三年に辨備中に云

[神事記] 日の使は八幡宮第一の神変に治美の義なり云〇明月記に建仁二年四月

植物類

冬至梅　太山橘
新生姜　ちゆうろう塔

生類

ぬくめ鳥　哀苦鳥
杜父魚　鯨
ぎぶらつ毋　ぎぶらつ紀
鰤　鷹
鷹　狩
鷹　匠
はし鷹　大鷹
水鷹　兄鷹
鷹　隼

三日山崎の民家悉く深雪中に埋る年毎に然り稀に世に出ることあるまれなる物の子乃ち雪くさもちなるべし

[新撰六帖] おけ〳〵

衣笠内大臣

や

山科祭 ヤマシナマツリ

上巳 社人勧修寺の南の境内往還路傍の水辺に修寺家の祖なり寛平十年より然はすりて宮幣あり今世に山科祭といふ諸司現神

[俳諸] 八王子天満宮西社の祭に天満宮の祠は愛宕郡矢脊の里にあり八王子の社は天満宮の巽二丁許の山麓に有

上巳 八王子の祭

八瀬祭 ヤセマツリ

傳ふ菅家少年の時比叡山法性坊の室に入て学文中往来休息の所に後人社を建て土人祭の日大竹を切て垂長に立て其の扇状なるを多く挿け鏑矢を射て以て一奥なり矢背一村凡百戸ばかり父老或は上なる人をのゝ〳〵又吾をはしてけらくふまの俚語をすゝ使に出なるこゝのなり

崎日の使 ヤキヒノツカヒ

[名勝志] 八幡宮寺中讃岐に云日の使四月三日是一郷万代の勤役なり山崎三年に辨備中に云

[神事記] 日の使は八幡宮第一の神変に治美の義なり云〇明月記に建仁二年四月

鷹狩之図

狩衣の袖

遠きあるきもや

雪の鷹

支考

此鷹のまもりさんにきも拳うち　夢太

山ふかやいつまでもなる鷹の鈴　青閑

鷹も狩や影に伴吹の雪　夜雪　紋

すきまもとあるもなるよ夜の雪　漢物

中心白く赤き紫花輝く似くて三四月花生ずる形野梅に似たり　**薮椿** 和漢三才圖会 女貞木の類 [公事根原] 冬椿 [四季部] 椿の花に似て紅色なり　[公事根原] 乱世この頃上洛日記 [四季部] 椿の葉に似て小なり　[公事根原] 乱世この頃上洛日記 [四季部] 椿の葉に似て小なり　[公事根原] 乱世この頃上洛日記 [四季部] 椿の葉に似て小なり

非之又一説 ● 菊花を取る

兼三夏物

兼築 築とけ

くい皮あり上下の築を裏ぬ上下の築を秋ぬ連ねる紀ハ上下の築を夏ぬ三季を連ねる紀ハ上下の築を秋ぬ連ねる紀ハ上下の築を秋ぬ連ねる紀ハ上下の築を秋ぬ

宗像祭　三島酉の市
北祭　日吉臨時祭
鵜祭　吹革祭
空也忌　鉢たゝき
道祖神祭　大師講
春日御祭
壽日辰日絶　報恩講
東三条神楽
神樂　里神樂
小忌衣　小忌の袖
山ゐの袖　阿知女
神乘り　神招ぎ

故ありて秋種子を生ず。葉は白苔の如く、三四月蕾を抽ず。青苞を結ぶ。花ひらく。ちいさい苞脱す。花四瓣大さ折盡の如し。花家慈姑花に似て白。紅。半白。紅花。吉英。おのゝ故に蘿春。ちゝの實壯丹に似たり。

錦樓花、ちゝ名つく

蘭に似て潤ゝ淡。清香。しかして微理あり。三四月蕾の白花を生ず。又英。此の三種の香色一さ

蕣三月 夏物

夏行　佛者四月十六日安居。七月十六日に至て九旬の間禁足安居既是を結夏といひ既に終るを解夏

南山抄に云偏に夏月約束に出ずるは一生無事越行は出世の業を修するを妨ぐ二は物の命を損ず慈に違くと実深く三界所爲既に非故世の謗を拓く

五雜組　四月十五日より天下の僧尼移剃髮して搭袈裟を結夏と云

又結夏を結制と云蓋し長類の辰に対て外出ずるを忌ずくいまだ出殿を傷らん故に九十日安居禁足

七月十五日に至て始て盡く出殿。去年を解夏と云

西域記に十六日に係るを是を結夏十六日を以て始と

蕣 白灰

[和漢三才圖會] 蕙蘭 蕣葉蘭 蕣耶蕣葉 蕣葉蘭 蕣を立て葉を生ず秋

子葉　採物歌
早苗　榊
さなえ　榊
弓　太刀
片杉　蔦
右はをるものなり
きいたる　人
まちまちのぶくろ　かまの
小前張　大前張
ちりけ　ちりけ
大こや　うえつき
星祝　祝

神祝

印度の法を中国に伝て一月に十五日天竺に月の満を以て一月とす則中国の十六日乃ち印度の朔日を安居と云

● 安居 [釈氏要覽] 南山抄に云形心辭擯 夏

夏書、夏經、○夏行は安居也安居は出家修行の殿を閉て私に住す故に安居の

斷

夏花。

間他の化益を事とせず三界萬塵に向て等閑の九旬に当る十日を旬とし九十日を以て九旬に在家も

九旬の間飲酒魚肉を断て一切の殺生を禁じ経文を誦して夏籠に入る

書写する有縁を友書に云ふ祖先の聖霊

會 八日

灌佛、浴佛、灌華會、花御堂、○凡諸寺院

甘水、佛の産湯、五香水。

灌佛會を修す諸石花を以て小堂を飾る是を花御堂に云ふ釈迦の像を安置して甘草等の香水を灌ぐ是を甘茶に云

[事文類聚佛運統記] 周の昭王二十四年甲寅四月八日中天竺国淨飯王の妃摩耶氏太子を懐胎して言く世尊若佛在世及び滅後未来世の中諸の衆生

佛生

[浴佛功德經] 浴佛慧菩薩佛に白して言く世尊若佛在世及び滅後未来世の中諸の衆生

中ふつくる	中おくあさくら	
三月	四月	
右ろ月神泉	日殿あかくし	
日うげろろ	日蔭の糸	
庭燎		
御火焚		
公事故実		
天長節	暦奏	
五節舞	帳書の試	
童女御覧	新嘗會	
豊明	符の使	
鎮魂		

○十二月之部

云何ら佛を浴せん佛言く我汝ら為に浴佛の法を説んと諸の供養の中に最殊勝なる象の香湯を作す浴器の中に置き先方壇を作りて妙林座を設け上に佛を置き諸の香湯を以て次身に灌ぎ浴し香あるを用ひ畢て後浮水を以て洗身を拭ひ取て自らの頭上に置く初像上に水を灌くのの時に梵唄を誦して云云我今諸の如来を灌浴も淨智功徳荘厳五濁の垢生垢を離れ清めて願くは如来の淨法身を證せん云云 ● 龍華會 【勅撰下生成佛經】時に慈氏菩薩勅を奉て大悲誓願を提挑あり名て龍華と云

箕和田鯉取	寒鯉取	
やつ免鱈	鵲巣をろ	
衣食類		
乙子の餅	藥喰	
鯛味噌	氷辭	
寒造り酒	豆腐氷	
さんにゐく氷		
神祇		
寒垢離	寒念佛	
卯國忌	猟入	
猟入粥	温糟粥	
最勝寺灌頂	佛名	
大德寺冥山忌	祢宮繪馬	
めうがの祈年		

和布刈之圖

吟さまく
そまのちくく
はるる
和布刈哉
拙叙

明るなや
和布刈の海く
星月夜
谷山

木下閣 蔵林して暗きを云 萬葉に木の晩とよめり

鯉 和名抄 鯉 和名伊師布之

崔禹錫食經 鯉魚性伏沈 して石間にあるものなり

惣じ鳥 壮鶏の異名

拾遺 伊勢の御うく奉るみ子のあくまつりの年明くるきを待て一夫くの山もとくくきりたん

安天神祭 千日 江州野洲郡江辺の庄まつり 永石村小村二ヶ村の氏神ニ

くれ〳〵惡しきくのうくあるん、

さの歌もて惡しくるて吳名せしまつり

て千 鎮座年月洋まつる明和年中すくく七百余年

まつるふる延久五年十一月十日正原載前守藤行

再建も〇年清盛の妻敦盛此地に出生故に年家乃

奉行判物大繪図氏子ニ村ニ傳来まつる又北部

季吟出生の地まつり例年二月十日より十三日まで連

年十句真に行なる養頭の地頭のを定例とする

緒球花 和漢三才図會 粉図の木ニまつる五七尺

葉は箱根うつぎに似て図く数なる四

月花ちくく初は淡青色後正白なり中きに花なつまり

図さ三寸一枝小形図くふるあるに木のくるる四五尺人家

江州八幡祭 中ノ卯

壁代ニまを撤て卯畳あくを新しきを敷せるふ卯腹ハ

卯直衣卯まくくの内ひくく卯張袴内藏寮ら

奉るなく

氷を供 延喜式 主水式ニ云元卯氷を供ス

ニ月四日ニ始まるく九月ニ十日ニ

畫ニ図書宿室図書宿室図書宿室の氷室石前の氷室大和国山辺郡彩女の氷室

室土図の氷室河内国渋良郡設良の氷室近江国志賀郡部花の

氷室丹波国桑田郡池辺の氷室近江国蒲生郡日野の氷室

公事故実

かづけ物　御製上
荷葉使　遊　雛

歳暮之詞

師走　東はしる
節季　しんせつ
煤掃　まつすすはき
餅搗　餅花
繭むしろ　青むしろ
米ちぐり　節分
やうべ　歳　松さす

穀雨　立夏　小満　芒種　夏至　小暑　大暑　立秋　処暑　白露　秋分　寒露　霜降　立冬　小雪　大雪　冬至　小寒　大寒　立春

あ

袷 元四月部

日を更衣まで此日より袷を用ひ始年といひて布衫を用ふ

青簾 青葦の笠

藻塩草 青葦の笠を作るなり一説に水草の葦を四月新日笠を作るなり一説に水草の葦を四月

雨蛙 枝蛙

和漢三才図会 背青く腹白く大なるもの寸余に過ぎず雨を呼ぶ故に雨蛙と名く

青蔦 大和本草 土蜘蛛雨蛙に似て小なり

蜀葵 黄葵 北葵 立葵 名又

季吟曰 青麦 蜀葵を詠じ四月花を開く木槿に似て大きく深紅白色なり又千葉有

青木の花 花紫黒色なり美なり枝の葉に似て大なり白色の実もとめ多く熟

漢名槐 葉細形にして

蓴菜 大明以前摘葉を用ふ多く圃を開き河海を採る

五雑組 蓴菜 [illegible]

昭明太子 立山漁の甲縁に縫績を長せしめ竹を作り長さ一尺五寸に作り水に浸す

和俗雲襦袢管襦袢 **汗巾** 長さ一二尺の布の端を縫ひ腰に用ふ

山堂考索 陽車を用ふる時は則日避て北に進む長陽後る故温暖なり

暑 昼夜

笠 臺笠 今の蓋を編て作る竹の葉を用ひ呼て編笠と云以て暑を禦ぐ

編笠

洗鱸 和俗夏月手肉を[illegible]作り洗浄めて熬酒浸しこれを食ふ洗ひ[illegible]

青鷺 和漢三才図会 蒼鷺 和名鷺 美止 言まくろい 緑の下畧 葵鷺 鷺に似て小なり 葵黒

汗衫 袖の端あるべき

汗襟 袖の端あるべき

汗巾

終夏

豆打　豆ちゆも
賓船　厄祓
やくおとし
ばくの枕　年忘
年の市　神打盃売
穂長売　かづら繁売
葉竹売　かや
門松
飾松売　年木樵
年ごもり　年木
やしき
年内立春　年の内の春　冬の春　衣配

大原ざくら　吉田大枝

内待所神乗　五條天神詣

むくらの実　蓬のもち

暮ちかつる春　古暦

春の末　札納

夏待　喜近き

春隣　星供奉

年籠　年の暮

行年　年〻の末

年の終　年の尾

いのる年　法ゆかしし

惜む年　ゆく〻〻満

翔る天道若葉美二夏月こもを愛せ

の二神あり春秦椒は七葉對生実て刺あり四月細花さき五月実を結ぶ生は青く熟すれば紅あり蜀椒は葉のふかく俱枝の間に生ずそれ実いまだ紅熟せざる

芒を青山椒と云

藜　時珍曰灰藿四月苗を生ず流灰藜は灰藿の紅心あるもの二種葉稀大あるは老るに従い莖枝ことなり藜の枝まるはまたく

鮎　若鮎は鮒にいたりて変ず

さ　山王祭　中の日

翔る天道若葉美二夏月こもを愛せ

の二神あり春秦椒は七葉對生実て刺あり四月細花さき五月実を結ぶ生は青く熟すれば紅あり蜀椒は葉のふかく俱枝の間に生ずそれ実いまだ紅熟せざる

芒を青山椒と云

藜　時珍曰灰藿四月苗を生ず流灰藜は灰藿の紅心あるもの二種葉稀大あるは老るに従い莖枝ことなり藜の枝まるはまたく

鮎　若鮎は鮒にいたりて変ず

さ　山王祭　中の日

近江国日枝神社は滋賀郡坂本に有祭神大巳貴命二月中の日江州東坂本の山王祭年の割過ぐ国風法儀形式比叡山の上の人等衆徒前駆して神輿を迎へ七社の神輿山を下る時前後をかこみ鼓吹すこして舟にのせ山門の僧侶伎樂を構へ琴笛を奏て神輿を迎へ七社の神輿横川を経て東坂本に下る京の山王町より供物を日吉の社に献ず前日天台の宗廟主の御室にまうでまを加持し翌日東坂本にまうして供ず

又江州膳所の他人所供を献ず祭の日清船二艘湖上に浮べ音楽を奏して伴の所供を献備ず是を御供船と云

崎祭　中の委　丹波亀岡八幡宮の北白雲寺

桜の実　和漢三才図会　清明の前後花を咲くさき実を結ぶ大小大豆ごとし生は青く熟すれば赤黑〻仁あり少毒好て人を毒を食ふ味は甘美なり毒を解ず俗に桜桃と云

さ　桐の花　時珍曰桐は花開を初て故に桐を掘て石を焼て大こして尖り長く角あり先に葉ありて毛

鮎ずしの魚屋門松まを売る江戸の市

何をこの沙弥の市に行雁　芭蕉

子をもちかはりの川成八紀年の暮　甘角

餅搗やゆずの見上る拝の先　許古

以徐〻くと人に云はまつ年の暮　路通

我書くこの句のあるを年の暮　尚白

夫婦して売る門の戸の煤掃　乙由

かく掲ゝ古俳立々り年の市 諜夢 家文 士朗 惟慶

餅や杵もさ〻ぬ鬼も来も

雑くゝ蓋くる年の一日ゝ郎

餅花や手形さゝて盃の上

ゝゝ橋の巻穴ゝゝ行燈

蓋て行年や髪の荒ささゝ

尾も影ゝ紹三味ゝ物名年 芝夜

年の暮 ゝゝの景

年の別 年の名残

大三十日 掛取

かけ乞

岡見 除夜

大年

夏の限 年仕舞

小晦日

蓑の玉乗

除夜

年の夜 ゝゝ守

〇忌日拾遺

義仲忌 正月二十日 近江粟津義仲寺ゝ墓ゝり

兼好忌 二月十日 西行忌 円上

千利休忌 二月廿日 蓮如上人忌 三月廿日

宗因忌 三月廿日 蟬丸忌 五月十三日

石川丈山忌 円上 京詩仙堂ゝ墓アリ

頼政忌 五月廿六日 山城宇治平等院ゝ遺跡アリ

業平忌 五月廿八日 季吟忌 六月十六日

宗祇忌 七月十日 定家忌 八月廿日

夢窓忌 九月三日 芭蕉翁忌 十月十二日

時雨會 於野會ゝ

伊勢忌 十一月廿日 永観忌 十二月三日

四季 作者歳時記所収

蹄花の花

木槿の如くゝゝて小くゝ五七月葉五七月葉

蹄の如くゝゝ刺多ゝ初夏白花ゝゝ

羊蹄根。時珍曰羊蹄ハ葉の長さ尺餘牛乃舌の形ゝ似ゝ多ゝ入ゝ蓋を起ゝ

和漢三才圖會 花を多ゝ以ゝ名つくゝ実を結ハ夏至即ち花ハ羊蹄ハ根を以ゝ云者ゝ実ゝ花ゝゝゝ大黄ゝ似ゝ和俗大黄ゝゝ云者ゝ実ゝ莖花ゝゝ赤の二種ゝ多ゝ実ゝ枝なゝら旅ゝ動ゝ生ゝゝ

和漢三才圖會 花ゝゝ狀倭の蕚ゝ似ゝ大さ蓋の如ゝ葉中の玉を食ゝ声好んゝ葉中の玉を食ゝ声

金柑の花

木橘の如くゝゝて小くゝ五七月葉橙のゝゝ刺多ゝ初夏白花ゝゝ

枳殻

ゝゝ樹橘ゝ似ゝ高大ゝゝ四月白花ゝゝ

羊

剖葦鳥

葭原雀、葭鶯、葭剖、

夏物 木

夏物

内衣

和名抄 湿空ゝ云 深浴の法七物を

布

曝布 曝布。紀事 夏日、奈良曝布八講布、木布の類ゝ曝ゝ晒ゝ麻布ゝ蕉布ゝ藤布ゝ

鴨足草

本草綱目 螺髻、虎

冥途の鳥

壮鶏

紀事 十王經 閻魔の卒三魂を縛めて閻の樹下ゝ置ゝ

の異名 二十 二の鳥接掌ゝ一ゝ無常鳥ゝ名つくゝ二を接目ゝ名

水産能

死事 南都水屋川の南ゝ水屋の社ゝ祭ゝ所の二度ゝ盡鳥ゝ名ゝ稲田姫ゝ名ゝ社祭ハ伏見院の御宇ゝ疫病流

一巻之式

賦物

貞徳云連哥ニハ五箇十箇ナレドモ賦物ハ多クハ八百韻ナリ

[illegible]

慧門ニ云賦物ノ法ナシ[illegible]

（そなへ草）賦物ノ文字ハ[illegible]

[illegible]

賦何袋俳諧

[illegible]

賦何袋連哥

[illegible]

密柑の花

[本草綱目] 樹ノ高サ丈餘ニシテ葉ハ大クシテ綠色二面光ル四月ニ花ヲヒラク白シ

夏三夏物

短夜

明安〜 [月令廣義] 夏至ノ節晝六十一刻三十分夜三十八刻三十分

[illegible]

水鰍

[和漢三才圖會] 惠曾魚正字未詳[illegible]

水鱧

[和漢三才圖會] 海鱧。慈鱧鱔

蚯蚓出ル

[月令] 孟夏月螻蟈鳴蚯蚓出 [本草綱目] 土龍、地龍子、歌女ホ[illegible]

[崔禹錫食經] 水松狀妻ノ如クシテ葉アシ [土佐日記] [illegible]

し

白重

[挑花藥葉] 白重表裏白堂平絹更衣ノ時上下ニ着之

薔薇

[illegible]

椶櫚の花

時珍曰三月木端莖中ニ發テ數ノ葉苞ヲ出ス昔年細[illegible]

芍藥

[藻須] 曰芍[illegible]

部類 俳諧歳時記栞草

見ハせそうつの文字を脱しそく人と脱ふ
るを好るも

此かの四字上下墨たるくハ難波潟を上下
墨せバ庭とまるせうのるゆ又五文字中
三字墨ゆ墨くハ法ぞくあるとくふを中
三字墨せば瓜とまるれとくひ又一字借
とくふハ
白雪ハ山の顔の化粧う郷
見ハ句中のけを毛と字せてゆ明ら

二字除篇
熊門ちとて都へのれき鶴の奥
見ハ鶴とふ字の思篇をとて重
とく仕立しあり

他源
岑ゆ山ゆ多くさの安さまの題目
見ハ毎の字を毒を深くさく毒とまる
るなり

和漢之事

大ようさ倦怠の徒を
守るべし和漢とも
に五句を以て限とす但し漢の数ハ夢
古句に可次者是物字本に真数和漢と
通用まべし百韻二の物ハ和のくるより出
たらハ漢にすまる是ゆあるを用るとも有

胡蝶花

和漢三才図会 鳥扇、是今云ふ所謂花
菖蒲四月花をくく壮麗尾のそさく似
一所白色茎の紋ありて実法ハ一種也著我方
ふしてはなの高麗の花と似く
茎ハ毎の字を毒を深くさく毒とまる
るなり

和名抄 若薬 和名 衣美須久須利
ふくしてはなの高麗の花と似く
茎ハ毎の字を毒を深くさく毒とまる
るなり

四手の田長

壮稼の
異名ニ
愛すべし

角

和漢三才図会 蔓草俗云銭通草字草の
貞俗云以く蔓草蘭の字とも鹿の角初くはも
未開蔓草に相似くり初ゆ長さ二三寸夫らも堅ら
らぞ本草云鼻くく嗅ふくく小白虫あくこまるれ

百韻

表八句 七句目 裏十四句 九句目 十三句目 花
表十四句 十三句目 月 裏十四句 九句目 十三句目 花
三ノ折 二の表裏に同し 名残の表 二の表と同し
同裏八句 七句目 花

文考曰四の表裏をひきて名残の折とくら

万句 千句 十百韻

文考曰歴
俳の二巻ハ百韻を数の限として十巻を
さめまハ千句くひ百巻ハ万句ハ
十百韻と千句の差別ハ一巻と十座のちがひ
十二時の因縁あるもくあり

異二夏物

新茶 古茶

京都名所図会 宇治茶ハ明恵上人栂尾山より
世人ちとまるとまるとまるとまるとまるとまる
文明ハ代ゆ
茶ゆ茶ハ明恵上人栂尾山より
茶ゆ茶ハ明恵上人栂尾山より
茶ゆ茶ハ明恵上人栂尾山より

表八句 七句目月 裏十二句 七句目月 十句目花

二ノ表 十一句目 二ノ裏 初裏ニ同

三ノ表十二句 二ノ表ニ同 三ノ裏十二句 二ノ裏ニ同

名残表十二句 三ノ表ニ同 同裏八句 七句目花

七十二候

支考曰七十二候とは百韻を三折にして三の折に裏を八句とし表を八句とし花五句にして三の折を名ハ七十二候候をうつしたるなり

易

表八句 七句目月 裏十二句 七句目月 十句目花

二ノ表十二句 十一句目月 二ノ裏十二句 初表ニ同

名残の表十二句 二ノ表ニ同 同裏八句 七句目花

支考曰易とは周易六十四卦の数にして

源氏

支考曰源氏とは三折にして歌仙の変数にして中頃の名目なるべし一説に名ハ源氏五十帖にもとり〇歌仙三十六句三二の形二十四句をもつて六十句とし花月の定型同し

五十韻

百韻の二の裏迄をもつて五十韻とす

四十四

支考曰四十四ハ五十韻の変数にして二の折の裏を八句とし表を十二句とし花の時宜を見合せ或ハ端句或ハ短句にして一度の首尾を作るべきなり名ハ四十四をもつて例のふ俗習なるべし移せハ祝言の初めなり

歌仙

表六句 五句目月 裏十二句 七句目月 十句目花

名残の表 十一句目月 同裏六句 五句目花

新麦

本朝食鑑 早きものハ三四月熟し晩きものハ五六月熟す麦の穂ハ

蕪菜

和名抄 蕓 和名沼奈波 潜確類書 水中生葉葉葵似て水上浮ぶ花葵白色毎朝開く

三月もつて八月に至て整細なる刻の後のち茎ハ中空にして茎と云なり

長頸水に浸て原産あり名つけて蕪菜と云なり

塵芥 十月 蕪菜 十月 ありて

蕪蓮

時珍曰蕪ハ酥と似て音

酥酪醍醐ありて蕪の性酥酪すして茎を行ふ也

蟬蝉

蛾の蟬と蝉を分つなり

廣瀬祭・龍田祭

四月 廣瀬の社ハ大和国廣瀬郡河合村にあり龍田の社ハ同国の

平野祭

此祭ハ春秋の二度行なふ故ハ前月なり大忌風神の祭りとなり

美人草

名花譜 花四瓣色鮮艷深紅にして中に黄蕊あり 古文前集 曾子固の美人草の詩の疑注に云項王亡滅して虞姫自刎ス

墓の上の草を人呼て美人草とも同詩に云

青血化為原草〇一種美人草と云者異種

単物

増山の井 陸奥の大忌の神龍田ハ風神なり

風水の難を除き世を治の祈に公より奉る云

釈名 衣の重ねきを名て衣と云

日傘

夏日日を除く傘ハ白紙を以て

用ひ紙を日傘と云なり

照陰傘と云なり

冷麦

切麦

書箱類記 湯餅 湿麺元麺を以食とす

餅と云

貞享式 冷麦汁の二品ハ京の家の式目に多くハ

秋の季に移せり

冷汁

煮冷 夏月羹を調和して

冷汁羹冷

干鱈

和漢三才圖会 法の鱈十頭

塩漬して白煮に作り形片板

干河豚

同上 名古

支考曰秋仙の名目の孤流とさるは十八番乃至の会もりその談人を秋仙とゝなつて是を上下の句を合せて三十六吟の名とゝなり

長歌行

表八句 七句目 月 裏十六句 文句目 月 十五句目 花

名残 表十六句 十五句目 月 同裏八句 七句目 花

短歌行

表四句 月 ゆゑ 裏八句 初句 月 七句目 花

名残 表八句 七句目 月 同裏四句 三句目 花

長歌の行も短歌行も来歌の体世者まと例の支考の新製なり（東華式）ゆひ（和漢文標求類）の序を委し

十八公

裏十句 九句目 月 表八句 上句目 花

屋雖あり背茨赤して白點なる棘鬣あり惡毒し味美なるゆゑ皮を剥てそのまゝを乾し皮賺と名つく

蜃 同上 蛤は水中の温を生ずること甚多し海の中に出て久しく雨水に浸されまたは潮に浸されて化して蜃となる

性石灰食塩を忘む故に塩を焼き蜃を焼き灰を作り形大きく背上に鼎爪多し行こと極て遅く温處に行り形大きく背上に鼎爪多し行こと極て遅く

蟾蜍 蘇頌曰蟾蜍くい人家の下

歳頭上角なる頭の下毋青を内黄と名つくよく山蔬を食ふ人是を食べてを以て為るべし術家取用ひて露を契し酒を形ち妖を祓ひ縛を解く今故の着蟾を裏の歳を祝ひ使ふ

書寢

蟹 同上 蛤は水中の温を生ずること甚多し海の中に出て久しく雨水に浸されまたは潮に浸されて化して蟹となる

性石灰食塩を忘む故に塩を焼き蟹を焼き灰を作り形大きく背上に鼎爪多し行こと極て遅く温處に行り形大きく背上に鼎爪多し行こと極て遅く

蝦蟇 抱朴子 蝦蟇千歳頭上角なる頭の下毋青を内黄と名つくよく山蔬を食ふ人是を食べてを以て為るべし術家

取用ひて露を契し酒を形ち妖を祓ひ縛を解く今故の着蟾を裏の歳を祝ひ使ふ

蛙 初句 月 七句目 花

蛙 初句 月 七句目 花

蛙 初句 月 七句目 花

發句

諸抄云一座の巻頭なるべきハ宗匠貴人老人の外ハ[illegible]句の体伸〻〻和〻〻〻〻相半ら〻に心おもしろくうるはしくべし云〻○切字の事ハ切字の事に注す

脇句

発句の時節を違へず餘情を詠むべし発句神歌恋無常時宜述懐なるべきハ脇句も同じくそのかゝらひなるべし發句雜なるべきハ脇も雜なるべき法抄云類をてはなれて別なる事なれ[illegible]

[illegible]

篠（スヽ）の子（ネ）

[和漢三才圖會] 篠ハ小竹叢生して苦竹の如し俗に垂の字を用ふ元篠に數種あり馬篠、皮篠、焼葉篠、五枚篠、此等の筍皆篠の子なり又二種長間竹俗に奈伊竹と云長間貧篠等、法例ともなるべき味ハ苦くして貼く微甘を含む酒に浸す

蕨（ワラビ）三夏物

涼（スヽシ）

[風土記] 仲夏長風扇暑法云 此節東南の風常に吹く俗に常雀風と云

鮎（スヽ）

[和漢三才圖會] 鮎を醸る法鹽少し擣て[illegible]

熟る● 崔鮎 [毛吹草] 柿の葉の崔鮎 [illegible]

[illegible]

形[illegible]似[illegible]依て名とも● 釣瓶鮎 [毛吹草] 和名抄吉野乃[illegible]

[illegible]

一説に此鮎ハ鮎を取て鮓[illegible]

水中に沈め置て熟する期有て生ハ故に和名抄[illegible]

● 月夜、[雍州府志] 飯すしの一名月夜[illegible]

[illegible]

● 宇治丸 [毛吹草] 宇治の鰻鮎是を宇治丸[illegible]

● 蛇鮎 [毛吹草] 蛇の形に似る故名つく

馬齒（スヘリ）

神社啓蒙 小津の神社近江國野洲郡に在る所の神三座所謂大宮二宮三宮是なり神躰ハ字賀魂に此を世に菅宮祭と称す

篠（スヽ）の子（ネ）

[和漢三才圖會] 篠ハ小竹叢生して苦のめし俗に垂の字を用ふ元篠に數種あり馬篠、皮篠、焼葉篠、五枚篠、此等の筍皆篠の子なり又二種長間竹俗に奈伊竹と云長間貧篠等、法例ともなるべき味ハ苦くして

蕨（ワラビ）三夏物

涼（スヽシ）

[風土記] 仲夏長風扇暑法云 此節東南の風常に吹く俗に常雀風と云

鮎（スヽ）

[和漢三才圖會] 鮎を醸る法鹽少し擣て[illegible]

熟る● 崔鮎 [毛吹草] 柿の葉の崔鮎 [illegible]

[illegible]

形[illegible]似[illegible]依て名とも● 釣瓶鮎 [毛吹草] 和名抄吉野乃[illegible]

[illegible]

一説に此鮎ハ鮎を取て鮓[illegible]

水中に沈め置て熟する期有て生ハ故に和名抄[illegible]

● 月夜、[雍州府志] 飯すしの一名月夜[illegible]

[illegible]

● 宇治丸 [毛吹草] 宇治の鰻鮎是を宇治丸[illegible]

● 蛇鮎 [毛吹草] 蛇の形に似る故名つく

馬齒（スヘリ）

[illegible]

覓（ヒエ）

[倭名抄] 馬覓 和名抄 高比留 ○時珍曰る[illegible]

[illegible]

第三

諸抄云丈高く脇句と時節を[illegible]

[illegible]

[illegible]

部類 俳諸歳時記新刻草

[illegible]

花菖蒲 馬骨の菊咲くべし 杜國
右冬の日 貴二

掘檜山家の休を木の葉降 芭蕉
右あの日 冬三

弁慶しまつ山の月を出さるべ 芭蕉
右新類の義 貴三

[illegible] 孫碩
右猿蓑 冬三

定家卿の作例 [illegible]

[illegible]

四句目

諸抄云 [illegible]

[illegible]

月花定座之心得

去来云 花は定座なり [illegible]

[illegible]

去嫌大意

(貞享式)云 去嫌とは天象地形より草木鳥獣も茂敵食疫も因くるを耳をぶく扱ち

四季 昨時歳時記新撰草

[illegible]

紀事 児童、柳の木を以て大小の刀を作りまるを菖蒲刀と云男児まるを賜ふ接なく頭巾をも着山伏の体ともなひ歩く

すくるぐわ 汨東後水の社の祭礼五月五日今年地利有

生玉の流鏑馬 五日 神社啓蒙 生玉神社は摂津国東成郡天王寺の辺にあり [illegible]

[illegible]

紀事 今日午の刻流鏑馬の門外より [illegible] 陳羽織を着し [illegible]

止む [illegible]

今宮祭

九日之中頃、山城国愛宕郡 [illegible] 十九日用、

[illegible] 神牛頭天王 [illegible] 神記

正暦五年六月廿七日疫神を舟に [illegible] 長保三年六月

[illegible] 神輿二基相殿の宮 [illegible] 相殿の宮八一説に愛宕の宮 [illegible]

[illegible]

半夏生

[illegible] 半夏一名守田礼月令 [illegible] 五月

半夏生蓋当夏之半故名守田 [illegible]

月令廣義 半夏は薬草之名 [illegible] 五月中 [illegible] 十日を半夏生と云ふ

花菖蒲

白菖

[illegible]

花ぐつま

[illegible] 古来 [illegible] 但

八雲抄 童蒙抄 頭注

[illegible]

蓮華

[illegible]

蓮華

[illegible]

羽抜鳥

羽抜鴨、凡諸鳥五月羽毛脱落て

忍冬花

金銀花、

[illegible]

見てくしこの遠慮なくなれいるまくくの間せ
ざるくも我くの間捨いまくきれくりきく是を我門
さ一理とお通くの公柳能楽の式も楚仙のえこ言
抄に温篤なく貞徳の門中くまるくすくくまど
くくまも連歌の家まくくび鹿あの新式を
誘形くもなるくり例爲情の行ちくびあを
たくい 袖ぬるる 泪、遠き 遥々、

天 空、雲 曇、の類ハ二句去の式なき
ども蕉門一派の爲のほと
びを離ると二句まて仮くくもむ古式ハ牡丹ハ一座一句
の抽句ハ徳ハ甘野法見子ハの吳名くく今一
つ句ぐくくく

あまたあるも夏と夏冬とを五句去る

神祇 一句なれども多くいせ人 神祇と神祇三句去る

釋教 神祇に同じ

述懷・無常 一句なれども述懷と無常と引合せ三句つゞけぞ述懷も同じ 述懷と述懷と無常と無常三句去る

戀 二句より五句をつゞく一句なれども捨ぞ 無常と戀三句去る 冬より五句去ると雖も後人の私あり

山類 一句なれども山類とつゞく 山類と山類三句去る

水邊 山類に同じ

寅後の逝を東とすれば尾花をまねく秋風をふく、此歌我朝俳諧

ち

重五 チョウゴ 月令廣義 五月五日 故に重五と云ふ

粽 チマキ 菰粽、角黍、錐粽、茭粽、粽、鉾粽、九子粽、芦粽、字彙 粽、鉾同一名角黍 風土記 端午に かさあり粽 菱粽、鉾粽、酸粽、餡粽、

鑿を烹て鉾を造る、名角黍、菰の葉を以て粘米粟を裹て長く煮せしも蓋し陰陽色異なる故也 唐の時歳節端午に粽の名甚多し 形制も一様ならず 荆楚歳時記 月令廣義 九子粽は角黍也

諸記 屈原、五月五日汨羅に投身す楚人哀憐して毎年此日に粽を作り米を貯へ水に投じて祭る漢の建武中長沙の歐回白昼に人をして自ら三閭大夫と称し回に謂て曰く聞く君の祭る所の物は蛟竜に掠られ去る可し今の人粽を以て之を上を畏れ此二物蛟竜の患を防ぐ

衣類 二句もつぐべし
衣類〻衣類三句去ニ

降物 二句もつぐべし 雨雪霜露
降物〻降物二句去ニ

聳物 上ニ同ジ

天象 上ニ同ジ

食類 二句もつぐべし
食類〻食類三句去ニ
飲食〻飲食二句去ニ

時分 夕時分〻朝時分〻三句去ニ

火体風体 二句もつぐべし

支体 三句去ニ

二句去 車ニ馬、船ニ頭ニ間、折ニ生類、添水ニ案山子ニ

か

和布 ワカメ
家願ひあるに人も亦假りてきをのらしむ。騎者上加茂の氏人壮年のものの廿人を擇びて各禄を給ふ。端午に騎射の事の祭儀餐を事〻にせ醴酒を以て礼〻〻蒲道を天下に示すべきのうえ、廿日

苅 カル
和漢三才圖會 石蓴海藻 和名迦末米俗和布の字を用ひ今云和加米 麁布 斜して 藻布〻云 本草 南海

加茂の足掛 アシソロヘ
紀事 五月朔日旧例に依て京兆尹、馬一疋を出さる。外武

加茂競馬 カモノケイバ 五日
討林采葉 或記に云祭礼の日に馬を走るは志貴島の宮欽明天皇の御宇天下世挙て風吹雨零時に卜部伊吉若日子命に勅

鳴子、雨に露、手に決、襷、傷に誠、月に朔日二日の日の字、月に日、星、今に〻の字、牧峯に遑、〻〻〻

戴。豆廻シ。山雀。日雀。四十雀。 毋[ハ]ヲ秋ノ[ヘ]ル[ヘ]ル耳ヲ[ヘ]ル[ヘ]ハ[ヘ]ル[ヘ]ル行[ヘ]ル[ヘ]ル[ヘ]ル

此五品は人倫の部なれども人倫と定めがたき物合をもとめらるべし

帝・仙洞・皇女・親王・新院・御門・天女・天童・鬼・佛・此十品は古式也〻の説有まれども人倫に二句又去留きまり御門は五音に三句去オ有まり 若菜・郭公・松虫・水仙・水鶏・三日月・尾上・此七品は會意の名目にて決して二つは有るべきの〻べき〻なり〻〻二字三字の〻〻を會めて〻〻名を作る類ひ〻字を造るなるべきの一名なり

雪・雨・此二品は雪四つ雨二つと古式に有るべし名数多きは四句も四つ

虫・魚・車・馬・飯・餅・茶・酒・此八品は日用の物なれば一句に二句又有るべきまり

松に子の日・月に更衣・花に吉野・此〻二品は連歌の作法にて俗語の家に編なり

鐘に鉄槌・仏木に妻・歎に木・篠に佐々羅・翠篭の菖に水邊・山伏に山類・夜分・此七品は古式の題の物なれを今〻式まるまの作法なり

闕伽・筵・火・轉寢・眠の字・起の字・虫・砧・此八品は古式

此夜ふ〻〻定めて〻〻〻〻〻〻の意〻て物合様〻〻の〻〻〻〻とは今式なり

冠に烏帽子・綿に木綿・夕立に雲・虎に狩・此五品は古式に消

白を踏ふ〻〻〻〻〻〻

部類 俳諧歳時記新撰草

とぐ打越を嫌ふ〜古今の通式

指合可有分別事

さて、とまる・頃、とまる・小、とまる・て、とまる・古式之大事〜とまるべし今式ハ

子細注 老・親子・此二品ハ古式也慣とまり

今式さい分別もくき支そそ 鳴子・網・花鳥の絵・花に接・楓に紅葉・

古式ハ鳴子を守る故に接物に二句去るやいなやの分別なし鳴子ハ秋の末に鳥獣の張子を二句去るの例なり或ハ草木鳥獣の張子を季〜に結ぶ故に接物に結ぶ故に接物に二句去るやまぎらはしき故に接物に結ぶ事を禁ハ二句去るの例なり

風鬼の草紙に赤地錦の二品を接物に花に紅葉の二品を接物に花に紅葉の二品の中に別あるやいなやの分別を問ふに張子の花

部類 俳諧歳時記 第三章

冬牡丹・冬椿・冬梅・紅梅・桃・桃樹の紅葉・山吹・郭公。此八品ハ花鳥の中ニも見ヘ句ニ入ル

右子ハ一きくの五例ニ故證用ハ二句あるべき吳俳ハ四ツ五ツ二句あるべし

風俗ハ二ツ三ツ四ツ二句一意の用を云ふ

日用可輕物之事

昔・曉・庭・垣・袖・袷・湯・汁・文・使。此十品ハ古式ニ一ツ二ツ三ツ替て

ハ四ツ五ツ

照・曇・泣・笑・植・苅・眠・覚・起・居。此十品ハ日用ニ多き

ものゆえハ面を替て七ツ八ツ九ツ

目・鼻・耳・口・手・足。此六品ハ支体の躰なれど平話の用多くれハ折をくて四ツ五ツ

加茂ニ同し例祭五月十三日吳ニ同し先始の上巳茂の氏人両人播磨ニ下向して神事の式を司さるなり三又當日宮の庫の龍女十二人舞楽をし出す

う

宇治祭 八月離宮の社

女十二人舞楽をし出す

宇治郡宇治の里ニあり郡の三座一宇治記演者

宇治の北ニあり

宇治の山城國宇治郡宇治の里ニあり郡の三座一宇治記演者

宇治神天皇、菟道雅郎子、仁徳天皇ニ當社ハ宇治の北ニあり

関白頼通公寺等院建立の時離宮を南ニ移し平等院ニ向ハしめ此寺の鎮守ニ

鶯の巣 先板の注

鶯音を入 月令 反舌無声 藏書

鶯の附子

本草拾遺 百舌一名反舌今の鶯ニ

反舌を蝦蟇ニも云ハ誤ニ

礼記疏ニ

鶯の子ハ春巣をくて反舌

貞享式 此式ハ例の當国ニ今播磨の子ハ春巣をくて反舌

ハ古月の間ニ毛をくて冬至の時ハ鳴ハ故ニ鶯の子ニ

の字を結ひて冬季ニハ云ふ夏ハ年暮ニて或ハ引ふの

親ニ附又ハ苗を以て引き伐ハ穂ハ古ハ反の間ニ多ハ附子ハ

決して反ニ苗

羅 細布ニ云ふの細き布織後縮の類

を結ひても反ニ

まくて後織の絹布を云ふ

ウキクサ

浮草の花 吳晉本草 水萍一名廉葉因くみ一ツ

一茎一葉根水底ニ入て五月白花ニ

尤可不審掟之事

老・福神・親子。元中古の式目を福もくに

葉一連俳の用ニ云ふ連ニ

ものニ数詞のあるを学ぶ

をはけんて滑稽ニ談笑の和を

今の風俗の相ひ云ふ

すして云ふ中ニも不審すべきハ法ニ

一老を述懐ニ云ふ表八句ニ福乃

神ハ福ニ云ふ

めぐ一合の字をもて述懐ニ

子ニ云ふ付ハ述懐ニ

ハ何故ニ

稲妻・雷光・烏鵲の橋。

龍・民の竈。古式ニ稲妻雷光を天象ニ

ニ云ふ烏鵲の橋を星象ニ

を生ずる数ニ

あるべし

あるべし

あるべし

民の竈ニ

あるべし

不審の事ニ

あるべし

用ふ

べきや

喜柳・蕤・楼人。古式

四季 俳諧歳時記 所収 草

去嫌 五月 く 九十二

く

藥玉 五月の玉、天暦所記 延喜十三年五月五日丙午

元荇菜ハ白或ハ黄ニ花水面ニ咲く

瓜の花 花黄ニ

各頸ニ

ニ云ふ

梅漬 梅干、元五月熟ニ云ふる

梅剥、梅を漬る梅剥ニハ

皮肉ニ

乾ニ

茅ニ

玉ニ

糸所ニ

黄を織

梅草紙 五月五日ニ繭庵より所業玉ニ

けくまつらもまれば御九帳奉るやの柱の左右ニ

雲州消息 今彩或ハ藥玉一流を給ふ作る百寿の花

ニ云ふ

古人の云ふ

藥草摘、藥狩。世諸問答 五月五日を藥日ニ

藥草競駈、

記 是日雜草を競ひ採る夏の小正ニ云藥を書て以て毒を

を止除ニ 宗祇抄 きくんのまるハ四五月ニ藥狩ニ

藥日 ヒ

[illegible]

一例たるべし 去歴ハ

泪の露・泪の雨・

青楓・樫鳥

[illegible]

曾不及論物之事

雪・霰・椿・花・蓮・実・

萱草花

クハン サウ

忘草、時珍曰萱艸護之作る護ハ忘なり詩に憂思不能自遣故欲樹此草

玩味以忘憂也、昔人こゝを戒療愁とかゝるこゝを藩安和に似くく

[illegible]

紀英愛の[illegible]

兼名苑に忘憂艸とも五月菖を抽んて花の形色と

邦の萱草[illegible]

[illegible]

[illegible]

いうぶせん 二ツ○上の五文字を逆く字にいうこせん。留まるおく字二以上二ツの内今一句の内にあるべし

いうこ・いうぶ 二句去二

は

はなし 上句下句物語にて也今ごつそうそうて三句まで

だうの星 七句去

だとば 濁音二句去二

に

ふとぬり 上句の下留る三句去二下句の

楊梅 時珍曰楊梅子形楊子の如くして味さくして酸似く五月熟す紅白ありて核細小

蛇状子 本草啓蒙 蛇床子古説ヤブシラミを充つ自別ニヤブシラミ即蠶衣糸雅蠶衣注云芹に似て食べし子大さ麦の如し一両相合し毛ありて人の衣に着く

魚簗打 石を堰木を障へて魚の往来を通るこの二ツ漢の梁に委し

ま

松本祭 初日

ふとぬり 二句去

ふてとまり 留る限りに二句去

来て相向ふ所の柱のうしろまで遠く遠く〜〜〜

此外作例多〳〵略之

るゝん 二句去二 ゆゝるゝんの類〳〵

か

かさ花字 俗に送字〳〵云 むゝらくゝうず

〳〵くの類二種〳〵〳〵〳〵〳〵も打越る 時〳〵送字の句を付るを 一形二分所〳〵いまぐし多〳〵いせ

うぶ 幾句の外に頭のゞゝ〳〵〳〵今 一句まゝまゝまゝ〳〵〳〵ゝゝゝゝ

〳〵ゝもまゝ〳〵 かとが 二句去二

かゝ〳〵ぶんのゝ二句去あり

よ

よ せよ〳〵よ〳〵の下知或いめて〳〵 さよ〳〵ゝ〳〵〳〵よの類二句去二

れ

れ 下知の れ二句去二

ゐ

ぞとぞ 二句去二

つ

つゝまゝり 形をゝゝゝ〳〵 もまゝゝし

輕利なる心むとき戦場息、〳〵ふ亦水車、水馬〳〵ふ海 將父老、土人悉く必臨て是を見る蓋越人舟を以て 車〳〵し揖を以て馬〳〵も故に是車水馬の名あり 和漢三才圖會 唐人来り長崎に寓居〳〵〳〵此日に遊〳〳〳

か 物ふかんとのもじ又つきせしふのあるとぐ皆二句去

ら らしとらしらんとらん 二句去

ふん等 のうりたる一字ふかハ二句去

う うち うちうちもあり出るの類二句去あり

わ や 形合を縫ふうちのやハ二句去

ま まど 折をきぐふとあるまねハ二句去

け けし・けさ 皆二句去あり

けり 二句去 まを意えけりあり文字打越をきらハず（ひさも）汐のさひく様の下すく日あり。

此外鯛あるる鯛の名の名ハ郷此外の度きを醫者のあるべし

実を結ぶ多くを籠ふ多くあるを篠ふ多くあるを篠ふ多くあるを篠ふ多くあり

莓の花 本草 [和漢三才圖會] 地水草、大明日華本草曰此乃陰濕の地、日晒ふ多く蔓延ふ多く蔓延ふ多く蔓延

[illegible]

さ

さとり 清澄 二句共三句の賜 形容てもこまを爆く **さとり留り**

五ツの物 **さとさ** 寒しきやひ[illegible]きの類 二句共二

さ

さも形〳〵留る 下句の也一句

と二句と出るもの形を之以上三ツ

せ

せんとつふ詞・する

とつふ詞 二句共云[illegible]るとするせんとせんとの類

す

ずとず 二句共云

別吟

別吟とは[illegible]難波と波、大和と大、[illegible]の類

[illegible]

寮所[illegible]菖蒲[illegible]〇菖蒲の所[illegible]衛士[illegible]を作る

[illegible]を法菖蒲をつゝむて梅[illegible]細木を以て柱とも

即ふ殿の形を作る **菖蒲人形** 此人形ハ力士の形を模して作きりもの

江戸[illegible] 異俗集 [illegible]さ[illegible]れや傘をつけるゆ人形其用

[illegible]もの今ハ十軒店、尾張町 **菖蒲の枕** 拾

[illegible]の[illegible]の[illegible]の

[illegible]

春の正花

花と杜鵑

古式夏之部（貞享式）今按ずるに漢家の俗は杜鵑を蜀魂ともいひて暮春の景物なれば春の用とすべきなれども本邦の習ひの異なる故に決して春と定むべし

○詩の花は正花なれども春の部に花字のそなはるを正花と云ふ故に暮春

夏の正花

若葉の花

（貞享式）今按ずるに月花を風雅に一巻の餘情あるべき時は若葉の花を自由に配すべきなれども若葉の花を必ずしても決して文字を定むべし

又攜の字を用ふ

枕草紙 木のさまはいとくろきまでなれども花のいとしろくさきたるもいとをかしくさくらの花にまがへておもしろしそれもうるはしくさきたる異

五月ごろまでもあるべし五月

紫陽花

四葩花

顔氏陽秋 唐の招賢寺に山花あり色紫氣香しく襍襍愛すべし人其名を知る者なし白樂天是を過ぐ樹を繞りて其名を紫陽と云ふ

和漢三才圖會 毛莖葉生ず莖葉綉球の葉に似て五月花さらく色淡紫二

朝菊

花景 花苦苣、救荒本草云人家園圃に好事の者多く載苗冬を経て長生す高さ四五尺莖細く葉ふとくして夢延するなり葉苦菜に似て光沢あり葉ふとくして淡紫を帯ふ初生莖の梢を採て食ふ

芍薬

池沢の中に生ず葉も花も蓮に似て細長く芍薬に似たり莖河骨より長く水中に横たはりてよりて葉水面に浮上る花の形睡蓮に似て五六月の間上に芍薬花を美き行菜を

栗蒔

和漢三才圖會 中古栗を

残る花 四月の部に注し

餘花

同じく部に注す

秋の正花

花火

夜分に

花相撲

植物に

花燈籠

夜分に植物に

冬の正花

歸花・餅花

植物に云

雜の正花

一書に云雜の花は花に前に至て文冬の季出るを冬花を隔る間と云ふべしされども次の隔句に春を季を重ねたる蕉門の例なり花を重ねたる蕉門の例なるも云

○書堂云蕉翁のくさくらるはいとをかしかはいと沈門の人の俳諧を雜の正花又は

[illegible]

以近世梁を去ること大抵粉ることを粉とも粘らさるものを粟と穂大にして毛長く粒細きものを粟と云ふ

穂ゆたかにして毛短く粒細きものを粟と云ふ苗ともに茅似て種類元て数十あり英赤白黑の差有り中

晩の種

杏子

本草綱目 杏の葉円くして尖りあるものを沙二月頃花を開く沙あるものを

香ふ黄にして酢を常るものを梅杏と云ふ

英を常るものを奈杏と云ふ大さ梨のごとく英にして

橋のごとき金杏と云ふ

青梅

一説に青梅は夢憑の物なり

和漢三才圖會 本草綱目に

荒布苅

壮園、苅ごろもとも云ふ

実の赤きを云ふ

蒙に似て

四五尺縦の皺文あり葉ふとく厚て稀あり賢実にして能ハ

小刀の櫂ごとくして葉

鯵

大和本草 東南の海に生ずるもの形肥大にして多く味美

美に文美美美美美美美美又空鯵

集鯵ありて味かしく劣る

集唐の天宝中揚州より水心鏡を進る者蠣殼ありて五月揚子江心に於て蠣殼ありて味美

五月の鏡

異聞

部類 御諸歳時記新編

作花 植物三句去

事ニ植物ニ作ル花ヲ花塗の

花うんらんざ

鼓鞨ニ模様ヲ

菜の花香 食類

植物ニ様ハ花ヲ菜ニ

花形 小説

さかり植物ニあるハ

花子の狂言

人倫ニ

燈火の花 植物ニあるハ

花うつぼ 食類ニ植物ニあるハ

花紅葉 事類ニ云(岑参集)ニ

貴之ニ梅ハ花ヲ

例あれハ句作ニもて来ル

戀の詞

(貞享式)我家ニハ詞ヲもて戀ニ色ハ

五月雨

(貞享式)我家ニハ則雨ニ

梭神記 金鍋の性ハ一名五月丙子日午時鑄

陰遊ニ十一月壬子の日子時鑄ル代陰遊ニ

高堂隨筆 鍋ヲ別て云陽遊一名陽符火ヲ日ニ

陰符水ヲ月ニ

五月五日を以て

五雜組 唐より以前ニハ揚州江心の水を取て

則ち佳ル

寂勝講 公事根源 先ヲ

て日を定めらる

四月の大寺、東大、真福、延暦、園城、最勝ニ

ハ他ハ水隍別あるハ

五月五日ニ

中梅英ニ

聞人立夏の後庚日ニ

百三十五日ニ

徹雨 梅雨 堺雅 四五月の

五月雨 梅雨 入梅、徹雨、和訓 義解

隆栗花穴、

例の詞ヲ戀ニ他門ニ

戀ハ陰陽の道理ニ

五句ハ時ニ

○支考云 戀の一条ハ今式の大事ニ

戀ハ一句ニ

戀ハ陰陽の理ニ

戀ハ句ニ

時ニ

榊の花 和漢三才圖會 坂樹、日本紀賢

普請場の数ニ一度ニ

拓櫨の花

さるとりの巣

五月蹴鞠

花史 杜鵑花又石巖花ニ

ぞくさぞあもとゐうりのつまきあくて

[illegible]率地川のつきさ〳〵如顔しそ[illegible]

[illegible]

○青豆云蕪門[illegible]

[illegible]

○[illegible]

一説に鄰曙岳[illegible]

[illegible]

九三四里むろ[illegible]

三四里むろ[illegible]

[illegible]

[illegible]

部類 俳諧歳時記 第五 恋

涙の海、涙の雨、袖の泪、袖の露、袖の海、涙の瀧、袖の雨、泪の川も海も泪も

恨 うらみの山、恨の海、うらみまくび、

夢 白体にて遊さまざまに 夢の通路

夢のたづき（雅語釈辞）夢のすぐるとつ、 聟入・嫁入・婚礼

待女郎、貝桶、ものもの、 新枕

若後家・若衆 寺若衆、町若衆、 男色 美少年、小々姓、

念者 男色をつかふ（一の谷嫩軍記）六孫太夏舗の段、宝暦元年印行 是の隠居さまの御子息の云孫太郎さまの冠者とは冠者 うらの親子の中、中男 親とさまの下わらは

愛まくし 下くし源山渓間より出ることを得るくし 縄を縋るもちりてまづ元一様を絞入くまる縋り上る

故秋百合と名つくことを試ず重も ● 車百合 同上

葉畧圓く数生して車輪の如く故名百合と云

花巻脇より出る花巻黒色なり ● 黒百合 同上 花く黒色のもの稀なし

惟紫色愛まくし本奥おより出 ● 博多百合 同上 花黄白色にして皆り斑の文理あり ● 鹿子百合 花律 白花紫点のあるもの故鹿の子の名あり ● 透百合 和漢三才図会 黄紅の数種あり花瓣鮮明にして上に向ひて開く奥おる出

み

みづきかけし 通俗志 糸切歯 年浪考 鼓虫 みづきかけしい水馬出ニ

水鳥の巣 浮巣 字彙 鳥穴ニあるを窠と

し

菖蒲刀 黒川道祐曰諸年に用る処の木刀或は菖蒲刀とつくり形の相似るを以

神水 金門記 重五乃日午の時雨あるを佩之

しかくの中を大事にさんつきなるいもしい旦那の念者であるのいろまくろ念者を兄分とさきいしろ親分といはるくらしい下衆（玉海集）角もまるまるかりのまをきろ四念者不なきつくるを、限光

別の袖・違ふ

袂 遊ひの袂、遊ふく年一ふ

密言・裏言・私言 さくさき

多 玉章、艶書、みうえん、

千話・袖引・尻はめる

門さなら・辻さなら

前まくる（すくなわ）ちりふ人信ちりふ 戦

契 ちきりの糸、ちぎりしちきり、

二世の契、うれちきり、 伊達

四季 非時成寺記所収

時の忌に一等の竹を破るに竹節の間に必神水あるを歴を撮要 今日雨ふるを紀 紀暦 年大を熟まを 新宮祭 五日 三井寺の山中に於て是

を戦を祭る神新羅明神 元亨釈書 新羅明神は天安二年円珍師智證大師船を泛て唐より帰る海中忽に老翁船舷

に現ず曰我は是新羅国の神なり誓て師の教法を護持し慈氏の下生を待ん語ておくまを○三井寺山下の土人ども

を新宮と称ふ

麥門冬の花 大和本草 葉厚く五月に莖立て頭に穂の如く

長く連なる紫花を開き実あり秋熟す

下毛の花 同上 鶴線草 小木あり

義蓮も鶴月草 蘭ゆくく四月花を開くくのつまるを

風きて盛久しまるのあるも淡紅なり愛まくし葉はすべ

花を根似る三角葉細き紙花を開くく一茎を群生す

とも女郎花 ものもしし

越瓜 時珍曰越瓜地を匍くく名つくる

俗稱瓜ものつくく南人菜花と呼

三月種を下し苗を生し地を離く夢

を引くく青色黄色花裏紅の間実を結ふ

蕺菜花

身たしまく。独寝。

人目。人目の関、人目を恩ふ

目ぐせ。神祈。憂別。

うきふ。色。恋好ミ、色ゴノミ

まふ。たらし。名ノ

たち。うき名、そら名、おもむ

名、ぬぐ名、あぐし名、恩ふ名、

ぐ名。うらみ。仇心、

待 待宵、たち人、まちまぶる、

待ちて、閨待、まち君、

鏡 十寸鏡、姿見鏡、占。占方、

辻占、口占、反占、夕卦ふ。

花四葉ニシテ白シ葉ノ臭キ甚シク家園ニ植ヱテ

繁茂シテ後ハ除キ去ルベシ篤信翁曰藷甲斐の山中

の村民ヒトリ此草ヲ食シテ甘シトフ

園史 金鈴振その茎幹二三尺叢生シ葉形似タリ梅花

ノ如シ花ハ蕊ノ如ク根ハ似タリ菱長ク白金ノ如シ

ひ 未央柳

菱の花 時珍曰菱一名菱ノ葉ノ支数ハ字ノ支ノ如シ

その角稜ノ長キヲ菱トフ三月夢

を生シテ延引葉水上ニ浮ブ扁ニシテ尖リ光面鏡ノ如シ

葉の下ニ殷アリ殷ノ如シ一茎一葉両相ヒ対シテ蓮の翅乃

如シ五月小白花ヲ開キ日ニ翳ク蓋

合シ雷坑ヲ月ニ落ク好移ス

ヒエ 稗 時珍曰稗

ヒシ

ヒ

ヒ

ヒ

父あし子・結ふの神・

懸垂文書・一月けの部ニ注ス

水つきし・一月みの部ニ注ス

帯懸帯・一月ひの部ニ注ス

筑戸鍔・四月つの部ニ注ス

雑喉赤・十二月をの部ニ注ス

郭ほとき・子をあんも・

仇くべ・（すくうせわ）実情い居ましく恨すきもの多くもつ

垣間見・ものの間ゆるるをうかがふをいふ

亜の印・（すくうせわ）むし乃印ともいふ守宮の印のしるしなるべし守宮の血をて女の陰ニぬりもちけば一期ほくせばしもし考ふ

田植（タウヘ）廿日 [襄陽群談] 摂州住吉神田を植るにて神戸を行ふニ相傳ふ神功皇后三韓を征し給ふの時長門國より植女をめしてて五穀農業の事を世ニ教へ給ふ国ふその季乳母の遷めしまゐ国ふ長ニ

[紀年遡加] 皇国ふ堺乳母の姥女のうち絹まゐ殺の奉公年期明ける女三人来るにくまゐ植今日神田を植ふくのまハ妓院の娼を出もとふふ住吉の御田ハ古き亜まゐ見て紅葉の千早ニ似るを看し赤き袴ニ市女笠をいふ昔ふ代の姿の織まゐニ今ハだ糸のまゐ似をなをのまゐ

李（スモモ）八間通志 食貨部云其品類一ありす白李、赤李、黄李名つく實情く脆く五六月熟ス臙脂李ハ皮肉ともに紅ニ味甚ふく

五月 立夏節 小満中 八十八夜、菊地祭 靖國祭

奮五月 雞賓律 芒種節 夏至中

仲夏、茂林、皐月、鶉月、橋月、月ふ月、早苗月、

もて助うせる忠ニ清ふよし博物志ニ云ふ守宮ハ蜥蜴ふ名ふ石蟻子ふ云ふ守宮のふい素の始皇帝宮人の私ふ通ふ事をおもんてその朱を飲ひて宮人ニ点ふ守宮の色ふ云

精合・

ふ中・薄中・中窓・（すくうせわ）婦ふ中ふ中ふ中

部類 御詠歌四言雜類

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一説、又ふるく見れども親の間一
さけて遠き物と云一説

二道かくる・岐のあるし

（日本紀）ヤマトヒメノミコトの東海を巡
るまさしくこの時のものなり
とも云ふ

濡衣・

ふるくより誠書云ふ〜後宮守
護する人の姿繼母の讒言をなす
蛮の濡衣を被る図て姿を朝廷
に訴へ出てその衣を脱ぎ盗めるよ
いまも世なれい父さらたく姿を害しぬ
のちかの姿父の夢にあらくあること
「ぬきさらるもの」は乳衣長き
ものなり〜のまり〜ありうるなり
誤を殺けたるべし

はまつらく

鈴・

人を落ちる人のまとる弱き所
はくとくり（後撰集）ふるの
神のうしきあるの時まつくしひと
身をしいてけハ

さらだ恒

山城の朱雀にあるを持
女此所と呼を書をあくる

故ふるく

錦木・

むかしはたの奥ふく
あるを女の門に立る
木あり、その朱一尺ばかりにて
たくさんの枝ありとよめり
（和花集）あるひとの立る物
木のくくりもの
（匡房 此の六条院）

誓文・起請・

男女たがひに神文
をかきたる

かきまる皆・

女のこゝろ
はたち寄るる物
のくくり

肉陣・

（天宝遺事）楊国忠多門客に
肥大なるものを多く行列して
人を遮ら
ん為なり蓋人の
を肉屏とこそ

後宮・

女の閨中美人の在所をこそ

美人の名・美人を畫・

（漢書）西嬪字は昭君漢の元帝の宮人
（西京雑記）元帝後宮既多〜
〜を得ず即画工をして形を
畫を案〜てまるを幸せ清
（李白）

㋐ 六月會

大和本草 今橘を記擬の木を
拔く似く回教異物之木のるさ二三丈実も拔く似くり
の花のぬくして黄色

或ハ傳教會、長講會、こゝ六月
四日を行ふ 文車抄源 こゝハ

傳教大師の忌日二〇山家説云ふ六月今ハ弘仁十四年始
行る建暦三年に勅して内齋会雇せらるゝ宣
命使なる〇釈最澄姓ハ三津氏近江国滋賀郡の人
神護景雲元年に生る弘仁十三年六月四日寂年六十六
貞観八年八月勅して傳教大師と諡す此今ハ叡山
の名こゝ論義有會場一院〜年番なり十月天台會
同年

㋑ 博多祭（マツリ）

博多、櫛田の神社を筑
前国那珂郡に有祭多詩
の神中殿ハ櫛田姫命或説に大若子命勸請ハ天平寶
字元年右殿ハ祇園牛頭天皇勸請ハ天慶五年左殿ハ
天照皇太神宮件の三神相殿の例年六月十五日祇園会を
行ふ景永享四年に始る作り山六基大き京師祇園会の
山に四倍なるもの右山後第に上張に組上る階上凡百人を
居り一基を引くこの凡千人ばかりに木偶人に鎧
を着せ〜階上に立て其甲冑に姓名を書付ふ故
に領主の家臣我も〜と美を尽して着用の鎧を出

四季三部 夏之部

三基供奉の行装又厳重なり

橋立祭（マツリ） 廿五日

風土記 丹後国与謝郡長の方に速石里あり里中に橋
崎なる長さ二千二百二十九丈廣さ九丈二尺ありを天橋立と
紀事追加 六月廿五日丹後切戸の文殊會同場立ふ文殊会場
立ふ図事 二〇天橋山智恩寺ハ延喜四年甲子勅して山
号寺号ありし荘田を賜ふ〜その〜四百余年を経〜
暦年中嵩山禅師住持を是禅刹の始に〜より三百余
年住侶詳なる〜寛永年中国主京極高廣別源禅師
を請〜住持せ〜む是より居の妙心寺に属する〜五
十石余文殊堂ハ巽向に明暦年中改造堂〜延喜の勅願有
こゝ〇橋立明神ハ中社豊受太神を祭る左ハ大河大明神
右ハ大竜王を祭る〇伊称浦名所に伊称ハ惣名にて凡日
本国〜亀面まで入江の裏向に丹後帰〜ふハ此所
〜〜〜

部類 伊勢歳時記新考

[illegible]

半夏草 蘭須圖経 半夏二月苗を生ず一莖の傍に三つ葉あり後緑色

蓮花 九世渡と云世の切戸の文殊と云是に内外の廣子日の縁美代の廣あり云も此稽立の別名あり○童灯の私に用ひ故かもの処を法私と云俗に三保ハ榜生しく榜立ハ一の枝榜てしくふさるしもあるや二四ぞるるの舟渡あり是を榜てしくふさるしもあるや二四ぞるるの舟渡あり是を

蓮 和漢三才図会 新瓜を用ひて縦八つ切腐敗を防ぐ塩と糅

蓮根 本草 [illegible]

蒜 [illegible]

蓮 愛蓮記 蓮花之君子者也○池辺に有る蓮の実貞徳曰蓮の実

蓮 花代の廣あり云も此稽立の別名あり○童灯の私に用ひ故

青楼・妓門、娼門、浮身宿、同類、妓家、揚屋、

遊女・うかれ女、流の君、傀儡女、遊君、雛妓、宿出女、夜発、辻君、女郎、たそがれ女、一夜妻、

傾城・傾城(傾国)美人の略(ちなみに美人の略)(美人一笑)了髪、妓の幼稚なる者

禿

鶏老(ヤリテ)・妓婦の老女

紋日・ものいつけ煙草・

けざし・飲うけたる客を飲むことを食ぶ

比翼蓋・思び

編笠・むかし吉原の里く通ふくるの流町(今の田町)、

部平が故事に長安城の東に種瓜五色ありて美味世に是を東陵瓜と云又支那の瓜に東門青門などのあるもこれ部平が故事なり

鶏冠(トリモチツク)**実**・和漢三才図会 鶏膠ハ是ヲ

心太(テン)・和名抄 大凝菜 和名古

竹生島祭(ナブシマ)(ツツリ)・十五日 神社啓蒙 竹生島神社八字賀神魂神聖武天皇天平三年竹生嶋現形ス 神社考 竹生島ハ江洲の海原、

竹

の茶屋ありて編笠をうりもとくうりつるもの事ハ世人のあるなりあるハ云ハ世種

[illegible]

暖傘・元禄の頃江戸吉原の花街中きぬくのウリ絵くあるふるきさハ今を変まうを元を暖今をうりを(五元集)

亡八・遠を傷して仁義礼智忠信孝悌の八ツを亡ぶ也へさ名づく

女楽・舞姫、白拍子、

伽やら・江戸にて舟饌以大阪にて伽やらうと云ふ

野郎・色子

陰間・男色を売さぐ者ニ

龍子・陰

神媒(ムスブノカミ)・(正字通)路史、女媧正姓、媒戸婚同是曰神媒ト

四季 非時歌詩記所採集

[illegible]

[illegible]

[illegible]

切字

（貞享或）むろ〜ろ切事のい十八字の品あり〜あ〜あまも連考もその品法ちまき例の何殺〜その為解せねば童部の仏遊〜むやう〜く自己多別もまる〜ものまたすし〜く中古の極性〜いろくの為自ものれとすず〜く連〜その用さまくい今の極性の為に用体別用乃たるんあるもまるべし〜るもく切字の用〜ふる物〜對〜て並別の義之事い見そして婚をまけて物をこつもる義〜路あり殺ものもてこの一章の発句とふまき里元切字の品〜ふ或い一字の働ちれやの字よの字の影をいん或い語〜顔の助字〜まるる〜の字むの字のるん

をこ云〜外〜何。誰〜〜〜〜〜。哉末（ナリ）と治定まるる遠を悟り働けい静〜く いろものこ相對の道理ある考〜〜い黄色の切ものこいて字を定むを及いと耶〜〜〜〜〜馬〜〜〜雅来〜治定を考〜〜〜〜〜

二字切
若大なり。

三字切
子供等。

二段切
夕つゝ。

三段切
梅。

をゝ段切
青くて。

こゝ段切
冬。

ゆ段切
柳の木。

よ段切
苔。

ら段切
裏。

ゆ段切
夏。

せ段切
せぶし。

ゆ段切
行春。

無名の切
名月の。

大段切
幸。

中の切
中の。

口合の切
昔。

切切
切。

拾切
拾。

中の切
中。

せぶし 賜、[貞享式] 此名ハ俗習ニ或ハ海辺の別荘ニ或ハ船遊の時ニ魚のあくびしたるさまを移もまゐ洗て極暑の名目ニ成ル是を例の賞玩ニ云べき三〇青蓋曰神ニ成ル海ニ成る鬼を直ニ船ニ乗て舎ニ成を中ニ成ル●せぶしとは鬱ある人の大きなる口を開くを言ふ切ニ成ル南海ニ成せぶし猶ニ成ル

わ **綿の花** [和漢三才圖會] 四月種を下す蕚圓く蔓の如し三ヶ月ニ成る四五日ニ成る花ニ成る葉の如し一枝ニ入る花ニ成る葉の如し一枝ニ入る花ニ成る葉の如し実を結ぶ〇此ものの種ニ成る

か **加定** [世諺問答] 六月十六日家祥ハ仁明天皇二年六月十六日豊後国ニ成る嘉定錢、十六日家祥ハ仁明かつゝ、

喰 白亀を献ずる吉兆ニ成る是を例の賞玩ニ成る家祥の儀ありこの日ニ成る更ニ亦献ずるこの日ニ成る家定通宝ニ成る名誉を賞玩ニ成る長明四季物語 仁明帝嘉祥の頃ニ成る御代の賞ニ成る家ニ成る

[貞享式] 此名ハ俗習ニ或ハ海辺の別荘ニ或ハ船遊の時ニ魚のあくびしたるさまを移もまゐ洗て極暑の名目ニ成る是を例の賞玩ニ成る家ニ成る〇青蓋曰神ニ成る海ニ成る鬼を直ニ船ニ成る家ニ成る中ニ成る●せぶしとは鬱ある人の大きなる口を開くを言ふ切ニ成る南海ニ成せぶし猶

[illegible]

ものや

白黒や[illegible]目を[illegible]く法の[illegible]

ものや

むさんや[illegible]甲の下のきり[illegible]

ものや

庭掃く[illegible]や[illegible]ける[illegible]

名所のや

難波津や田螺の[illegible]

疑のや

[illegible]

○此やうなるのやは上に疑のやなどいふ[illegible]下さ、[illegible]。[illegible]。[illegible]。

ふの四

畢四

つ

つい大ゝ タヅ ゝ ゝ 星 ゝ ゝ ゝ

又一説

能越まる迦之比奴もと幾　到重

なん（ちやもん抄）

世ゝ間のあんとんひつけたまゝ唯ゝ
ゝ能らゝる祖ゝまゝまゝあんとゝ
る祖まゝ山ゝ

ん（同上）

今まゝを後をまりゝまをまゝ
ゝゝまゝまゝ

らん（同上）

ゝんゝまゝまゝんゝまゝまゝ
ゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
テアラウ、まゝまゝまゝ

らゝ（同上）

らんまゝまゝ性ゝ又ゝ空あまゝらんの
まゝの面ゝ理ゝまゝサウナゝまゝ里語
まゝまゝまゝ
芳野紀行中

相國寺（サウコクジ）臟法（ゾウホウ）

紀事 二月十五日語の相國寺閣上にあるく臟法を修せ
世ゝ間を臟法ゝゝ又相國の鈴小鼠の繞齒寺の弘空
ゝゝ見ゝ古く佐ゝ木氏ゝ寄附ゝゝ沙ゝ二ゝ〇寺中ゝ空
家郷の墓
あゝゝ

つ

月次祭（ツキナミマツリ）

十一月 公事根源 これも六月十二月ゝ年ゝ

二度清社（所撃を奉らせ
ゝゝゝ弘仁年中ゝ勅ゝ

津島祭（ツシママツリ）

十四日十五日

牛頭天王の祭ゝ尾張國海部郡門間の庄藤波の里有
社家傳記 欽明天皇元年ゝゝ豊ゝ浦ゝ天王ゝ
めゝ島ゝ
地ゝゝ
祖ゝ
夏ゝ祖ゝ
神島ゝ
きゝゝ
ゝゝ
笛声別
樂ゝ

ゝ尾張の西紀ゝ
ゝ尾張ゝ
ゝ天皇の
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

な

（あるべし抄）

ナアと人こゝろくるるなし　芭蕉

二日まぬるまいせしかの春

を

いとゝしき妻を雀のうき鶺　洒堂

世話のを切てあり

べし

（同上）

[illegible]

あり

[illegible]

かな

（同上）

[illegible]

里言カイノ、[illegible]春ハ来ていまとゝくまも祝あり

やハ

[illegible]

夏引の糸

（妖怪抄）文引の糸とい庵まりぶつそ。同

神馬藻

（下学集）神功皇后異國を攻め[illegible]

茅瓜

（和漢三才圖会）

奈良漬製ス

（同上）糟漬の法なり出用

夏神樂

川社。（奥儀抄）川社のゝ[illegible]

夏獲

夕獲。文は[illegible]

夏引の糸

（妖怪抄）文引の糸とい庵まりぶつそ。同

神馬藻

（下学集）神功皇后異國を攻め[illegible]

茅瓜

（和漢三才圖会）

不動言の切

[illegible]

神祇之格

[illegible]

先哲の作例かくの如し

釈教之格

[illegible]

恋之格

[illegible]

参詣之格

[illegible]

追善の格

[illegible]

述懐の格

[illegible]

羈旅の格

[illegible]

餞別の格

[illegible]

名所の格

[illegible]

所産の格

[illegible]

四季

[illegible]

月

[illegible]

勾之格

[illegible]

納豆造ル

[illegible]

夏切茶

[illegible]

夏ぶし

[illegible]

蓼茂る

[illegible]

む

虫干

[illegible]

う

打水

[illegible]

の

凌霄花

[illegible]

く

鞍馬の竹切

[illegible]

景清も花見の客には七兵衛
むくつけきけ鉄丸とあだ名取

蚤虱之格

粽白ふたをはずれば顔髮
降もしも外樹白は義と蚤

蚤讃之格

山炙や宇治の結節の白山椒
まろ法師の俳諧とん明の秘傳

疊字之格

ちろ良七重七堂伽藍八重桜
蕭々と雨降ちろり床の山

時宜之格

梅白し時ぞ鶯を盗まれ
寄り来て彩や梅の花

時宜とは天子の使人を賜て情を述るをいふ前の一章は野老しの紀行に三井秋風の山家を訪ふ云々の詩集なり時宜あり後の一章は陰鮮集に出る

を着し山刀を佩て上に出る一本の行を近江に称し一本の行を丹波に称し法師名十人左古を剣を用時宜

を揚て山刀を以て山を伐るを蠶の遊走するを蠶の

両國の名山を上る遠うまるもの巷を捨てしかりて

して後に弁を以毘沙門堂に集り又殿に長を截

ることを竹切と云長崎延命を截るの巷を言

松提寺鑑禎和尚室亀中に居をとてトス雌雄の大蛇あり

鑑禎持念を一蛇忽ち死を禎一蛇に謂て曰此山水近し水

を施すべし蛇ひて去儀して清泉湧出を今の園

伽井是也 寺誌 竹切のこと具は遠花會云是中興開

山岑延和尚咒法を以て蛇を斬るの遠意として岑延

の遠忌會に夜の護法は冥山鑑禎と一蛇を救ひ護法神と

なせし 遠意二字

雲の峯

社詩 寄峯突兀大雲昇
陶潛詩 夏雲多奇峯

大和本草 葛の葉夏月に入るに上るに
飲むに渇を解胃を傷らず功有り

葛の花

藤頌曰葛は春苗を生しつるを引て一二丈
和漢三才圖會 花豆の花に似て大きく実も

また莢豆豆の莢のごとし

烏賊

崔禹錫食經 烏賊一名水母
月の海中に在るに似たり故に

名付く 隋故雜談 烏賊生せし故に烏賊多し

此月取て擣の葉多く割て烏賊の肉を白く煙を用

ひまぶしてとり集を以て煙滅まる

霍乱

傷寒論集成 正珍曰夫霍
乱の病は夏月暴に飲食

過度の致す所胃中擾乱上吐下瀉する者是霍

曜と古字通用 説文云曜は肉羹なり大氏人の食の畜

傷る処肉食を多故に特曜を挙て一應食物を流

の字に山を加て暴乱と云〇青豆

烏賊雜魚の肉を乾て香物の類霍乱を去

の字に山を加て暴乱と云〇青豆

の字に山を加て暴乱と云〇青豆

隋故雜談 烏賊生せし故に烏賊多し

ま

蟒

和漢三才圖會 蟒蟒一名醯雞 列子に
打壌の上に生せし蟒に因て生せし陽

紀代氏部に息さ知れて〜〜〜る諸春
あり句意は笑日記ことをまこと父
弘氏の王世道の風雅を為の数ふ
るべし〜〜〜

賀の格

先祝く梅を〜〜の〜〜竜

雑の格

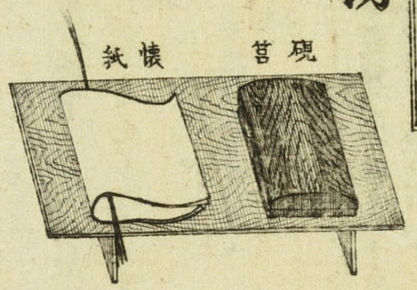
〜〜〜

抱字

夕顔の秋いろ〳〵の瓢の形、上をやとなり下をくびとなし結んとくゝめはぎさる成秋いのパ字ゝく上乃やの字を抱くゝも

執筆法式

文臺餝



禎曰二三月種を下し五六月花咲き七月瓜熟す美濃國本巣郡七の桑村長甜瓜の種屋二故丁吉

素瓜と名つく

け 解齋粥

江次第 六月十日後暁十二月十日後暁

一月中卯後暁 公事根源 神今食の後の粥したけきもの卯の色すなる御産の大麦子すゝく麦麩一斛をもゝく

供まあるまきさゝをもちけゝまる麦の内汁をそゝくちめして内著をゝ川ゝ神今食ゝゝ後齋

三口めして内著をゝ川ゝ神今食ゝゝ後齋

ゝる中ゝゝのゝゝゝ解齋の粥なゝを供しゝていゝ神齋あゝゝゝ

四季神歌を所落せる歌を引き来り挑灯の
ふるまひなり

○裏一順に付る時喜至花の作者を屋
むすびし赤花あると付る時うるさ香の
ふるまひなり

是い歌に出る事の役を務て定むべ可し
赤花の句出る事ハ揚句を挑灯の多く
もるゝ事ハ人の耕を可し

○満尾の上端に記す年号月日出記
懐紙の裏を右の様に左の様に
押へ先に懐紙の頭を持て
雑を二折に定を折り
端を結んで結る
但し懐紙年号迄善悪起あるも九字二字
別書に成る是等ハ是等に書て
初めて

○宗匠の例吟し一字有る右のまゝ
筆を持て右の様を立て歌句を
吟しあるを左歌句を続の花の白い二
返吟まるまで吟し続て宗匠連
点く撰抜し文書を以て
末を終る
但シ亜億赤菊の亜億或ハ青の亜善く

四季 俳諧歳時記新撰草 巻之

歌句を出集めて記ハ宗匠と復た
歌句を二返吟して再返を
歌句出るれい脇に吟し宗匠へ
復ふ特有る宗匠の
体なるは直に懐紙を目八分に特
書記し一度吟して
○表六句目迄出る時は七句目
に成る句メリ裏十句目迄
花出る時は次句目に
句メリ折を奥折毎に月花の座を
雅して吟可し
宗匠の
筆を

七代孝霊天皇五年津島国地新に湧出る時富士
山現れ一得延暦二年記曰武蔵国延喜式神名帳
[神社啓蒙] 浅間の社ハ駿河国[一宮記]
冨士権現と号も大山祇女
木花開耶姫命云

腐草爲螢 [月令季文] フサウナルホタルトナル

腐草蛍と註云腐の字を
得る故に愛して
を愛ん

舟遊 フナアソビ

冨士を遊ん
浅く社遊

風蘭 フウラン

[潜確類書] 一名桂葉名茶譜白花
祥雲くして動し砂土を用ひて行の
を行へ豪ある処に
山石の雲に
樹下及舞下に
つく花の葉に
を以て

振舞水 フルマイミツ

夏日市井の間に
拘及ん茶
苦しむ人を
[毛吹草] 勝尾寺の氷餅 [清異録] 和俗今日に至りて
猶雪水製しる粉餅或ハ勝尾或ハ富士より出る氷
日を浮て氷室の節句も

黄雀風 クワウジヤクフウ

[五雑組] 六月
中に雀の
今人熱の元を傷るを知て有病を病を
薬用く薬を代て謂らく
日を

金瓶子 カネ ムシ

[大和本草] 北戸録曰甲虫三五六月草蔓
生も南人拾て以て粉を養て本州蟲
瓶の所緑のやうに婦人白粉の器中に入る雄ハ緑色
光有るも雌ハ所々黒斑多し世蔵鐵に似て長翼あり
俗呼虫

極暑 ゴクシヨ

梁元帝詩云季夏
須暑流金爍石

雨乞 コウ

雩祭 ユサイ

時珍曰雩雨ハ夏月解表の薬冬月の麻黄を
用ふるが如し
虚の者尤多く服
傷寒の元
病を病を
代て謂
服して
を

天満御祓 テンマノミハラヒ

[拾遺雑抄] 社家説云天満宮の權輿ハ人皇
二代村上天皇の御宇天暦年中此地
の神天満天神
十二代村上天皇の御宇天暦年中此地
了於て一夜に変花生
怪云帝都を言て
廿五日 當社ハ拾遺西成郡
天満に在

氷餅祝 コホリモチイハフ

人の面像あるべかりしを有時なる人の面を
床の方へ向てかきなるべしを向なる
ろ格なり

○筆を立初るより脇後筆を仮名あり
入きたるもし下に立て上へ入るの事の右
のしのあるを先をかし出し立可

○表八白生氣書始る時白を書付
て後立て上に打越をする裏うらの
白付くるうらへうを表十四白出
来る時筆の脇へうを云先出る付有
二の折の端を押へて左のをうを出き文
書の向へ立て是を赤打越をするんだ
たえあるを相二の折の端る書の付る
ぬくに二ヶ下を二三の形も回クミ下を
名紙の形ハナトヲ下ス

○筆合去遍を為名へ回行まべ
うらたる感義正しうあ座ざる書
茶湯手まを参欲まべうたる欠ル時
を解まを結まべし

○筆へ四文字知女字ハ仮名へ書
可し指合を揃へうへ度へ懐書を
見るべうたる

○吟詩ハものやうを書留し三の折々
ハ別して高声へ吟まべし一度の志ある
名筆の類へ遠京の迎屋あるきやう
ほ意を可し

○筆を遠方有へ見へ被書の志る時
見わへし三四白懸へ吟まべし

○懐書へ書様を秋の時の吟へ
うるるを回赤茶盤の石墨白をへ今
文へうへうへ出書へし

右執筆之式を家への作法なるへ
是を文略を記を猶処へ口伝有も此余
要想新定ホ名花懐身あるを回への
故実なを文へ執へ学ぶ可し

附合之事

諸風体口受
三ヶ之大事

○服者三四白目文への身方ハ前へ番へ
或ハ虫肉貴。去学。行。又ハ五義。十体。
三義。五体。文外へ回への伝付へ云
も白を主へ付へ書是ぞへ書へ
初句のいへまべきへ入用へ
有きへ文へ時之
伝方へ文へ法を付へ脇を付へ
時分を付へのんを文へ為へ

四季 俳諧歳時記新撰雜記

愛宕の千日詣（アタゴ センニチ マウデ）

神社啓蒙 丹波国桑田郡水尾の山なる愛宕神二座
伊弉冉尊 火産霊神 [神祇拾遺] 愛宕権現の端ノ
門前軒遇槌命 奥の院の動伊舎那美尊 [紀事] 六月廿四日
愛宕詣是浮日の千度詣と云俗ことに幾千日詣と云
寺僧云協之云この日参詣の人へ協食を食もこと幾
坊着へ文へ札を買へ協擂の粉を求め粉を入
是を肩へ上て協の殺い竈の上へ挿むへくの如く
ちへ奥を免へ元亡母国安穏越あり貴賤を釋
いて毎年札を稽へ贄を駕る此便を勧へ
つ水殿へ多へ愛宕権現垂跡本地勝軍地蔵菩薩
是則慶俊法師再考勧請へ社へ当社は一めい妹山
摩へ年へ光仁天皇元年今の地へ移へ

麻の葉流（アサノハナガス）

板草、麻の葉を切て祭へ
板へ川へ流へ

暑日（アツキヒ）

暑き日へ
六月の季へ

青嵐（アヲアラシ）

文水立の梢の緑を吹へ
此へ一説六月十日

夏祭（ナツマツリ）

神社へ時へ神託へて日難波の稲を植へ
へ是へ奉へ
へ祭へ
へ
へ

[illegible]

七名八体[illegible]

有心・會釈・道句・起情・向附・拍子・色立・

元此名目[illegible]

又八体[illegible]

其人・[illegible]場・時分・時宜・天相・観相・面影・

又ハ 句・付・置・寄・志・移・見入・走・

又ハ 平・四ツ手・風情・詞・違・心・相對・埋付・

元ヶ様[illegible]

中ニ空一点の雲あり青き[illegible]大事に東風のくいるを葉茎[illegible]赤色[illegible]

文曰人[illegible]を愛して花稿を摘む

赤草 アカクサ 鹿文曰赤草一名山藍染[illegible]七八寸[illegible]一茎一葉[illegible]

六月青稲多千畦碧泉乱[illegible]作る[illegible]

藍苅 アイカル 和漢三才図会 四月苗を刈

[illegible]七十日[illegible]

青田 アオタ 杜詩

麻 同苅 和漢三才図会 苧麻大麻[illegible]皮を剥[illegible]

[illegible]

麻地 アサチ 諸国名物記 豊後国の製[illegible] 和漢三才図会 南都[illegible]

[illegible]

酒 サケ 諸国名物記 [illegible]

[illegible]

阿古田瓜 アコウリ 阿古陀瓜 [illegible]

[illegible]

書番椒 アカタウガラシ

[illegible]

竹 ホウヅキ 青しかして文[illegible]

[illegible]

青瓜 アオウリ

[illegible]

西園寺殿妙音講 サイオンジトノミヤウオンカウ 紀事 [illegible]月十六日

[illegible]

[illegible]

百韻の地 三十三 かくいふは[illegible]

[illegible]百三十三 [illegible]

自句 十七 [illegible]

[illegible] 十七 [illegible]

[illegible]

東遊らしめ給ふ毎月十日妙音講を行はるる○妙音天とは弁才天なり

座頭の涼 記事 [illegible]十九日盲人[illegible]

[illegible]を設く廻二月十六日の式に倣ふ

座摩の御祓 廿二日 社説 按ずるに西城郡の総社座摩神宮八十五代神功皇后三韓より歸陣の時神武天皇の古例によりて御祓難波の岸浮見石の邊[illegible]庚子難波大江の岸田蓑の島に結座(浮見石今の[illegible])[illegible]右三津井の神に[illegible]加へて五座に例祭云月廿二日夏越の大祓なり神輿内[illegible]所に座御[illegible]の旧跡八彩屋の南石町にあり[illegible]今[illegible]辺を[illegible]南は[illegible]に属し北は免[illegible]郡[illegible]山を田蓑島と[illegible]江口の辺[illegible]社の[illegible]大正年中圓江の側に[illegible]孔雀日氏子[illegible]の塵物を出す社司西横川の上に床を構へ形代を流し禊を[illegible]修す

小蠅声神 神代巻 [illegible]彼地多[illegible]蠅[illegible]神乃小蠅声[illegible]

[illegible]神あり後草木咸能言語[illegible] 異儀抄 [illegible]

[illegible]神の[illegible]

[illegible]の庚を初伏とし四の庚を中伏とし立秋の後初の庚を末伏とし三伏とす

鯖釣 時珍曰青魚之鮭を作る[illegible]名つく[illegible]大[illegible]のを鰆魚とす 和漢三才図会 [illegible]登の海上に四月多し数万[illegible]網せ[illegible]又獲べし

鷺草 和漢三才図会 奥州所々に[illegible]草あり春苗を生じ変の[illegible]名く連鷺草[illegible]五六寸葉大く[illegible]年春の頃[illegible]花白色鷺の[illegible]

豆豆 和漢三才図会 十八豆豆長大[illegible]の水草[illegible]相混[illegible]其莢長き[illegible]

[illegible]夏至の前[illegible]

○歳句に服附る事

[illegible]

歳句初しるしは題まく[illegible]題向のよう[illegible]句作あり

服は初しるしに[illegible]とつけて初[illegible]

是を打添の服とす

市中は物のにぎはひや夏の月　曙しるく門々の[illegible]

歳句は夏の月う題に市中は題向しるく物のにぎはひとせしに題向と題の月の[illegible]

服を暑りしるくとふる夏の夜に付て[illegible]月は二句の間さなる和市中といふて門々と待くく声を物の句にふる人に対して情をむすびまる[illegible]

是其場に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

川の名も水清くして溢れ落ちず是祓を修する七瀬の一に准ず人此水に臨みて暑を避く

[延喜式] 下賀茂の社司

四月の十日に[illegible]所に一めんの菜[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

行の字を用ひしに[illegible]又けそくき[illegible]

[illegible]

是打添て時分預

牡丹花 [illegible]打の[illegible]四三片

[illegible]月廿日の[illegible]

叢白い牡丹の優美なる姿[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是相對の説なり隋志有仙二

冬木立月曹藷を入来うか
　　其句老杜の詩き腸

[illegible]

四月十七日蕣も房前に当酒三升の山時歳民を慈愍を垂れ人の故を民を恩沢を報せ給ふ[illegible]

十五日より十七日迄三日夜の間漁人の墓に於て水祭をなす此日漁人交易して市をなすこと[illegible]

農業の傳授あり[illegible]

季夏土潤ひ溽れて暑し注云溽は濕二上の[illegible]

[illegible]

説文岩間に出るを糞と云[illegible]

貞享式清水を注ぐ[illegible]

水の清涼を称する[illegible]

調ふ及び[illegible]

門の新撰

暑 溽暑 同 冬

清水 ミヅ

油造 ユヅクリ

[和漢三才図会] 醤油造り名比之保本邦の俗油乃字を加へ醤油と書く豆油なり

白梵天 シロボテン

和州田村の梵天此辺[illegible]

醤 ヒシホ

氷室 ヒムロ

[日本紀] 仁徳天皇六十二年十五月額田の大中彦皇子闘鶏を猟も時に皇子山上[illegible]

[illegible]

置大中王を呼て[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]